

2012年度CBRセミナー

CBR VS 三方よし

報告書

日時：2012年10月13日（土）10:00～16:00

場所：戸山サンライズ 2階 大・中会議室

主催：公益財団法人日本障害者リハビリテーション協会

後援：埼玉県民共済生活協同組合



目次

はじめに.....	4
プログラム.....	5
主催者あいさつ.....	6
講演 ピーター・コールリッジ氏.....	8
講演 小梶 猛氏.....	33
講演 山口 美知子氏.....	39
講演 野々村 光子氏.....	43
講演者の皆さんとの対話集会.....	51
講師プロフィール.....	65
ファシリテータープロフィール.....	66
折り込み図 (東近江 魅知普請 曼荼羅)	67

会場風景



講師の皆さん
(左からピーター・コールリッジさん、小椋 猛さん、山口 美知子さん、野々村 光子さん)



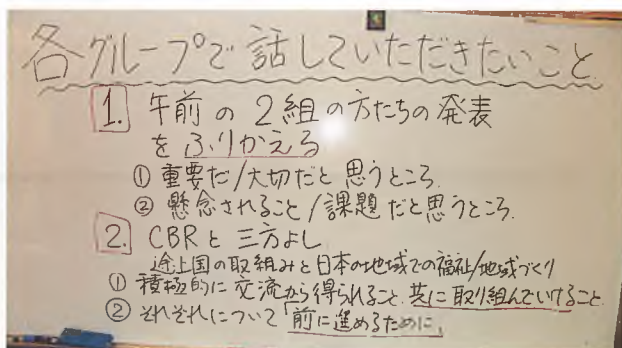
松井 亮輔・日本障害者リハビリテーション協会
副会長による開会のあいさつ



参加者同士で講演についての振り返り



午後の進行役をつとめた林 かぐみさん (前方
中央)、尻無浜 博幸さん (前方右)



グループごとにボードの内容に沿って
話し合いが持たれた



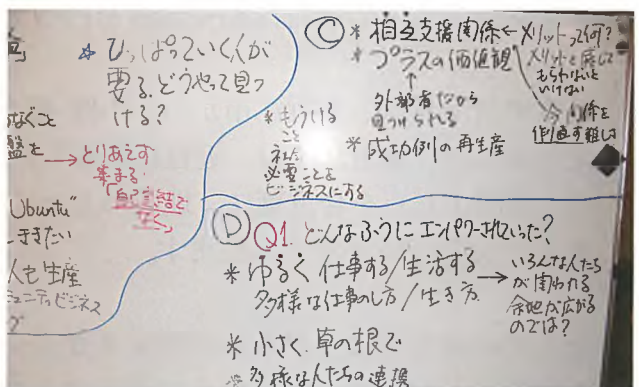
グループセッション



グループセッション



グループセッション



グループごとに、話し合いで導かれた内容を発表



講師を交えた対話集会

はじめに

2012年10月13日に開催した、CBR セミナーの結果を報告書にまとめました。今回の CBR セミナーでは、CBR ガイドラインの「生計」分野の執筆に関わられた、ピーター・コールリッジさんをイギリスから講師として招待しました。

コールリッジさんは現在はフリーのリサーチャーとして活躍されています。これまではアラブ諸国等での調査活動や講演を行ってきました。

日本の講演者は、東近江市から、小梶 猛さん、山口美知子さん、野々村光子さんをお迎えしました。東近江市は、近世に活躍した近江商人発祥の地で、「売り手よし、買い手よし、世間よし」を合言葉に、地域の人々に還元することを考えていた人たちで、CBR の考えに大変近いと考えられます。

セミナー後半では、グループディスカッション、コールリッジさんと東近江市の3人との対話をとおして、国を越えて共通することや取り組みの違いを参加者と確認しあうなど、意義のあるセミナーとなりました。

なお、本セミナーは、埼玉県民共済生活協同組合の助成を受けて開催されました。ここに厚く御礼申し上げます。

本報告書が皆さまのお役に立てましたら幸甚でございます。

公益財団法人 日本障害者リハビリテーション協会
2012年12月末

■ プログラム

【午前】

- 10:00 - 10:05 開会のあいさつ
- 10:05 - 11:00 進行：高嶺 豊氏、琉球大学教授
講演：ピーター・コールリッジ氏、フリーリサーチャー
- 11:05 - 11:25 質疑応答
参加者による振り返り
- 11:25 - 11:30 休憩
- 11:30 - 12:15 進行：河野 眞氏、杏林大学准教授、日本作業療法士協会
講演：東近江市の地域作りと地域福祉の取り組み
<講演者>
小梶 猛氏、学校法人司学館校長、
NPO しみんふくしの家八日市、建築士
山口 美知子氏、東近江市緑の分権改革課主幹
野々村 光子氏、働き・暮らし応援センター “Tekito-” センター長
- 12:15 - 12:40 質疑応答および参加者による振り返り

【午後】 午前中の講演者の皆さんとの対話集会

進行：林 かぐみ氏、アジア保健研修所事務局長
尻無浜 博幸氏、松本大学准教授

- 13:45 - 14:00 午前中のグループ毎の発表
- 14:00 - 15:50 対話集会
- 15:50 - 16:00 まとめ（高嶺 豊氏）

閉会

◆ CBR セミナー

CBR vs 三方よし

◆ 進行説明

司会 時間になりましたので CBR セミナーを始めたいと思います。本日は日本障害者リハビリテーション協会主催のこのセミナーにお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。この CBR セミナーは、ここ数年前から開催していきまして、その都度、海外から著名な方をお招きし途上国でのお話を聞くという会を続けてまいりました。本日のタイトルは「CBR vs 三方よし」。いずれも耳なれない言葉と思われる方もいらっしゃるかもしれません。

この中で CBR を聞いたということがあるという方、どのくらいいらっしゃいますか？ かなり手が挙がっていらっしゃいます。ありがとうございます。ではもう一つ、三方よし。これについて聞いたことがあるという方？ ああ、ずいぶんいらっしゃいますね。ありがとうございます。それぞれどうということなのか、これからスピーカーの皆様からゆっくりお話を聞いていただければと思います。

まず開会に先立ちまして、開会の挨拶を、私ども主催者を代表しまして、副会長の松井亮輔よりさしあげます。

◆ 開会あいさつ

松井 どうもおはようございます。紹介がありましたが、日本障害者リハビリテーション協会副会長の松井です。私自身は、かつて国際労働機関（ILO）アジア太平洋地域総局（バンコク）に勤務し、アジア太平洋地域における職業分野での CBR にも携わったことがあります。現在はアジア太平洋障害フォーラム（APDF）とあって、アジア太平洋地域の約 40 の障害関係団体から構成される組織がございますけれども、その事務局長として、アジア太平洋障害者の 10 年の推進に NGO サイドからかかわってきたということです。

今日はピーター・コールリッジさんをお招きして、CBR 分野の国際的な取り組みがどうなっているのかについて講演をしていただきます。コールリッジさんに何うと、今回初めて日本にみえたということですが、コールリッジさんの著書については、中西由起子さんが訳されたものがございますので、恐らく今日参加されておられるかなりの方が読まれているのではないかと思います。そういう意味で今日コールリッジさんから直接お話が伺えるのは、私達としても大変光栄に思います。

それから今日は東近江市のほうから 3 名の方においでいただいて、国内における地域づくりがどのようにすすめられているのかについてお伺いできることを大変うれしく思います。CBR というのは決して途上国だけのテーマではなくて、地域づくりという意味では日本も、これからますます取り組ん

でいくべき課題だろうと思います。

ご承知のように国連の障害者権利条約の中でも、国際協力、特に中でもインクルーシブ開発について言及されておりますし、来年9月の国連総会に合わせて、障害と開発に関する世界サミットというのが行われることになっています。これはこれまで国連が進めてきた開発目標、ミレニアム・デベロップメント・ゴール (MDG) に障害が含まれていなかったんですけども、障害をきちんと、その中に位置づけるということが意図されているわけです。つまり、これまで障害の問題は別個に扱ってきたことが、地域の開発の中にきちんと位置づけるということです。CBID、つまり障害と開発ということが、これからの大きなテーマになると思われますので、そういう意味でもこのセミナーが、非常に有意義な機会になるように願っております。最後までご参加くださるよう、よろしくお願いいたします。

◆ 講演

伝統的価値体系と障害と生計に対する 地域に根ざした取り組み

ピーター・コールリッジ
(フリーリサーチャー)

司会 それでは早速、午前中のプログラムに入ります。お一人の方と、それから三人の方をグループでお招きしております。まずお一人目の講演者、ピーター・コールリッジさんの紹介と、このセッションの進行を琉球大学教授の高嶺 豊さんをお願いいたします。

高嶺 皆さん、おはようございます。高嶺と申します。ピーターさんの紹介が、皆さんのお持ちの冊子の25ページ(本報告書65ページ)にありますので、そちらをご覧くださいいただければよろしいと思います。

障害と開発分野で著名な方であるということは、皆さんご存じであると思いますし、それから様々な出版物も出されております。

中東地域のヨルダン、パレスチナ、レバノン、それから南アジアのインドとか、そういう地域の開発、特に障害と開発問題を研究されて実践されてきている方です。

東アジアのほうは、あまり来られたことがないということですが、今回、日本に来ていただいて、大変うれしく思っております。それであまり長くなるとなしますので、早速ピーターさんに講演をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

ピーター・コールリッジ氏講演

「開発とは、社会共通の利益のために関係が強化されていくなかで進んでいくものである。」¹

はじめに

東京で開催されるこのセミナーに招待され講演する機会を与えられたことを光栄に思う。遠い地球の反対側から人を招くということはすなわち大きな期待を持たせることである。そのような招待を受けたことに恐縮するとともに大変名誉に思う。

障害分野における私の取り組みは、特に中近東、アフガニスタン、インド、及びアフリカ南部など、

¹ Malcom MacLachlan, Stuart Carr, Eilish McAuliffe (2010): *The Aid Triangle. Recognizing the Human Dynamics of Dominance, justice and identity.* Zed Books.

すべて途上国における経験である。十分に発達した福祉制度のある先進諸国の障害分野で仕事をした経験はない。しかし、私が話そうとしていることは、先進国、途上国の双方に関連していると思う。

私の経験は30年以上もさかのぼるが、その間、考え方、政策、実践において大きな変化があった。ここ10年前後、私は障害と生計に焦点を当てており、2010年発行のWHOの「CBRガイドライン」の「生計」の章の主執筆者であった。そこで、今回はインクルーシブ開発との関連で生計について話すことにする。

国連障害者権利条約

過去30年間、障害の状況を調査していると、国連障害者権利条約（権利条約）が障害に対する考え方と取り組みにおける基本的なパラダイム・シフトとして際立っている。障害者は慈善、医学的治療、及び社会的保護の「対象」としてではなく、むしろ、権利を有し、その権利を主張して自らの人生について決断をすることができる「主体」として見なされる。権利条約は、障害者を障害者自身に変化をもたらす主体であると見なし、インクルーシブな社会を構想しているのである。

権利条約について話したいことが二点ある。一点目、権利条約は重要な功績ではあるが、その存在だけで障害者の生活を変えることはない。人は権利と法律では生きていけない、つまり、人は議会が制定する法律によって発展していくのではない²。実施戦略と過程が必要である。権利条約は、政策及び実践を通して履行されなければならない一連の基準である。

二点目、インクルーシブな社会という概念は新しいものではない。今回の講演の主要な点は、日本を含む多くの国の伝統的価値体系に注意を向けることである。これらの国々では公正でインクルーシブな人道的社会が伝統的価値体系の最も重要な要素となっている。私は今日の講演で、伝統的価値体系と権利条約、地域に根ざしたリハビリテーション（CBR）とコミュニティにおけるインクルーシブ開発（CBID）、それぞれの間の関係を描写しようと思う。工業化の進んだ社会ではこれらの伝統的価値体系を大きく見失ってしまっている。そして、権利条約、CBR、CBIDという三つのツールが、私たちの人間性に欠くことのできない古来の深遠な理想を私たちの中に呼び起こしてくれる。

権利条約の主たる推進力となっているのは障害者自身の行動である。権利運動としての障害者の決意と粘り強さは世界各地で一般市民の意識に多大な影響を及ぼした。意識が極めて著しく変化したのは、特に非先進諸国のリハビリテーションの過程においてであり、これらの国ではCBRは障害者と活動する上で最も有力な戦略となった。

CBR と CBID

考え方が変化するにつれて、CBR 自体も自らの進化を経てきた。80年代初期の当初は主にリハビリ

² Cornielje, H & Bogopane-Zulu, H. *The Implementation of Policies in Community Based Rehabilitation (CBR)* in Hartley et al. *CBR Policy Development and Implementation* UEA, (no date, but post 2006)

テーションに焦点を当てていたが、今日でははるかに大きな枠組みのなかで考えられている。すなわち CBR は、障害者の幅広いニーズに対応する、多分野にわたる戦略であり、社会参加とインクルージョンを確実にし、障害者の生活の質を向上させるものである。現在、CBR はまず、権利、貧困削減、及びインクルージョンの実現化を目的としている。

リハビリテーションからインクルージョンへというこの根本的な変革が、コミュニティにおけるインクルーシブ開発 (CBID) という概念を生み出した。コミュニティにおけるインクルーシブ開発とは、建設的な相互支援関係を表す言い方である。生計をよく見ていただければ、古来の伝統的価値体系の中心をなすところの建設的な相互支援関係によって私が何を意味しているのかよく説明されている。

「生計」とは何を意味するか。

貧しい国では経済活動からの排除はおそらく障害者差別の最大の理由であろう。障害者の雇用率は低く、そのため一般的に非障害者よりも貧しい。

就労・雇用は人としてのアイデンティティと自己イメージにとって極めて重要な部分を占める。私たちは誰もが貢献したい、変化をもたらしたいという本質的な願望を持っている。また、このようにして家族や社会から評価されるのである。

生計とは単に雇用または収入を意味するのではない。生計とは、どうにか生きていくためだけでなく、熱望と大志を持つ人間として活躍するために、自分自身の生活を組み立てる方法でもある。

貧困は経済的観点だけで測定できるのだろうか。貧困とは単に収入が欠如していることではない—すなわち貧困とは人間として成長していくための基本的な自由と機会を否定されていることである。貧困撲滅は、可能性を最大限に伸ばす機会が「すべての」市民に平等にある公正な社会を構築することにより可能である。

世界各地で実践されている CBR には、歴史的、文化的、経済的、地理的及びその他多くの要因によってさまざまな方法があるが³、共通している特徴は、CBR は平等な機会を創り出すための実際的戦略であるということである。中には、CBR が伝統的価値体系と強い結びつきを示している国もある。

ジンバブエのオフアの例の考察

オフアは車いすの利用者でジンバブエのブラワヨの市場で果物を売っている。夫は彼女の障害が原因で彼女のもとを去ったし、自分自身の子どもはいない。しかし、姪が学校に通うのを援助している。

³ *Cornielje, H & Bogopane-Zulu, H. The Implementation of Policies in Community Based Rehabilitation (CBR) in Hartley et al. CBR Policy Development and Implementation UEA, (no date, but post 2006)*

彼女は卸売商から果物を購入し、一回に一箱ずつ車いすの膝に載せて運ぶ。月収は約 50 ドルである。

彼女は、地元の障害者団体、教会のグループ、貯蓄グループ、及び町内会など、地域の様々なグループに所属している。

オフアのことでもまず驚くのは、その幸せな様子である。いつも笑顔で、前向き、社交的である。不満は全くない。明るい、楽観的な精神で人生を送っている。

次に驚くのは、彼女のバナナの値段は市場の隣の売り手より二倍も高いことである。これはどういうことか。

答えは「ウブントゥ」である。「ウブントゥ」とは南アフリカで用いられている概念で、アフリカ南部のほかの国では同じ概念が別の呼び方で使われている。

著名な南アフリカの指導者であるデズモンド・ツツ氏は、「ウブントゥ」を次のように説明している。

「ウブントゥを持つ人は、寛大で他者の役に立ち、他者を肯定し、他者が有能で立派だからといって、脅威を感じることはない。すなわち、その人物には自分がより偉大な世界の一員であるという認識に由来する適切な自信がある。また、他者が恥をかいったり、傷つけられると、自分も傷つけられたように感じる。」

「もし他人が傷つけば、私も傷つく。」私たちはより大きな世界の一員である。私たちは単なる個人ではない。私たちは共通の人間性の一部である。私たちすべての間にはつながりがある。

私たちを人間たらしめるのは何か。私が人間であるのは、私が何かの一部になっているからである。参加しているからである。分かち合っているからである。つまり、「私があるのはあなたがいるからである」。私が意味するのは、私は私の周りの人との関係から、まさに私以外の人々との関係から生まれる人間である、ということである。

しかし、工業化が進むにつれて私たちはこの理想をますます見失い、自分自身を一人一人の個人と考えるようになってきた。

オフアはバナナを隣人より高い価格で販売しているが、これはジンバブエでは今でもウブントゥの原則が機能しているからである。彼女には支援者のネットワークがあつて、これらの人々は、単に彼女の支援ネットワークの一員であるという理由で、彼女の売るバナナに喜んでお金を多く支払っている。

ウブントゥはまた市場の業者の間でも機能している。オフアが自分の露店を離れて果物を買いに卸

売商のところへ行っても、隣の店主がそのあとの面倒を見てくれる。市場の業者は皆お互いに助け合っている。これは、市場を主に競争的であると見る現代の経済学者とは、全く異なる「市場原理」の見方である。

オフアは言う。「私は神をおそれます。粗末なお金の使い方はしません。細かいことに気が付きます。お客さんとは友達になります。もし私が成功したと見られているなら、このようなことのおかげです。」

しかし、オフアの成功の本当の鍵は、じっと家にいて「自分の権利を要求」するというのではなかった。彼女は積極的であり、前向きで楽観的な考え方で人生に取り組んでいる。人々に手を差し伸べ、友達になり、自分自身、自分の時間、自分のわずかなお金を惜しみなく差し出している。オフアは一連の大きな相互支援関係の一部である。

オフアの収入は月 50 ドル。しかし、彼女は貧しいだろうか。

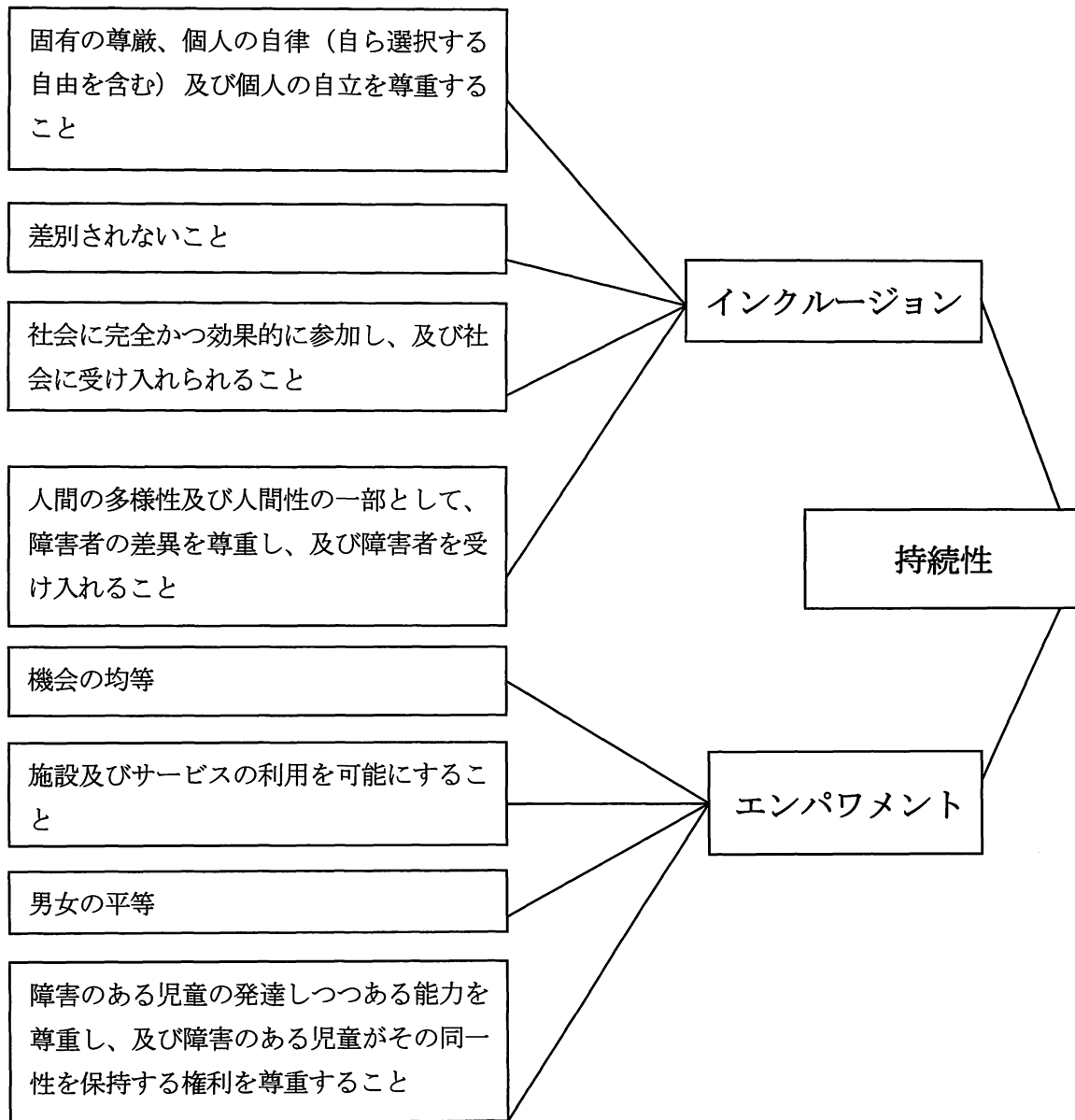
権利条約と CBR の原則

権利条約の原則について思い起こしてみよう。

1. 固有の尊厳、個人の自律（自ら選択する自由を含む。）及び個人の自立を尊重すること。
2. 差別されないこと。
3. 社会に完全かつ効果的に参加し、及び社会に受け入れられること。
4. 人間の多様性及び人間性の一部として、障害者の差異を尊重し、及び障害者を受け入れること。
5. 機会の均等。
6. 施設及びサービスの利用を可能にすること。
7. 男女の平等。
8. 障害のある児童の発達しつつある能力を尊重し、及び障害のある児童がその同一性を保持する権利を尊重すること。

（事務局注：1～8 日本政府仮訳による）

8 項目の原則は覚えにくいかもしれない。しかし次の二つの言葉に要約できる—「インクルージョン」及び「エンパワメント」。そして CBR は、これらすべての権利条約の原則を導入すると同時に、「持続性」を付け加えている。



これらの原則はさらに一つの言葉－ウプトゥーに要約できる。最良の CBR とは、障害者のみならず関係者すべての生活に目的と価値を提供する支援関係のネットワークである。最良の CBR プログラムは次のようなものである。

- 学際的なチーム、及び（もしくは）障害とリハビリテーションのあらゆる側面で訓練を受けたスタッフを関与させる。
- 自らの限界を承知しており、専門家に照会すべき時を知っているスタッフがいる。
- 対象グループが表明するニーズに基づいたプログラムを作成する。
- 地域社会開発、及び技術的スキルの訓練をスタッフに行う。
- CBR は孤立して存在できないことを認識している。つまり、CBR はメインストリームのサービス、及びさまざまなリハビリテーション専門家が提供する、より専門化されたサービスを補完するも

のである⁴。

ここ日本には、今回のセミナーのテーマである、「三方よし」という考え方がある。あとでほかのスピーカーの方から詳しい説明があるが、基本的に意味するところは、商人も職人も、いい商品を作れば人はそれを買いたいと思う、ということを知っている、ということである。人が商品を買えば、商人は儲かり、お客さんは満足し、地域社会のためになる。これは、質の高い技量、及び顧客との透明な取引に基づいている。三方すべてにメリットがあるのである。

インドの例を挙げて「三方よし」を説明しよう。

インドのハンセン病ミッション職業訓練校

ハンセン病ミッションは、インドにおいて、若いハンセン病患者、もしくは親がハンセン病患者である若者のために多くの職業訓練校を運営している。今日ではハンセン病は薬で完全に治癒することができるが、依然として偏見が非常に根強く残っている。

これらの職業訓練校は、世界各地で職業訓練校が教えている自動車修理、大工仕事、電気部品取り付け作業、裁縫などの職業技術を若者に訓練している。世界各地にある多くの職業訓練校の卒業生の就職率はあまりよくない。しかし、インドのハンセン病ミッションの運営する職業訓練校の卒業生の90%は卒業後一年以内に就職している。

何故か。理由は三つある。

一番目、これらの職業訓練校は、技術的熟練だけでなく、生活技術にも焦点を当てている。

自動車修理を学ぶだけでは十分ではない。就職で成功するには次のようなことも必要である。

- 決意
- 意気込み
- 社会的責任
- 進んでリスクを取る意志
- 楽観主義
- 親しみやすさ
- 失敗に直面した時の粘り強さ
- 創造性
- 他人の考え方を受け入れること
- 批判的に考えること
- 高い個人的基準

⁴ Adapted from Cornielje & Bogopone-Zulu.

そしてこれらの資質は、実例により、ロールモデルにより、また、これらの価値観が実証され高く評価される訓練校に一つの文化を創造することにより、教えることができる。

二番目、これらの職業訓練校には就職担当官がおり、その仕事は、雇用主候補との関係を築いて卒業生に就職を紹介することである。一旦会社が、訓練校の卒業生が技術のほかに多くの貴重な個人的資質を備えているとわかれば、さらに多くを採用してほしいと説得する必要はなくなるのである。

三番目、学校には活発な同窓会があるので、すでに就職している卒業生は、若い卒業生が就職し、雇用を維持していく上で、支援することができる。

生活技術訓練、就職担当官、及び同窓会というこれら三つの要素は職業訓練校の成功の秘訣である。三方すべてにメリットがあるのである。卒業生は就職できて満足し、雇用主は技術面でも人間的な面でもよい仕事を任せられる人物を得たことで満足している。

これらの訓練校は、「三方よし」を基盤に運営されている。というのは、訓練とは単なる技術以上のものであること、自動車修理工場の経営を成功させるためには自動車修理の知識以上のものが必要であること、つまり顧客との関係及び労働者間の関係性も同様に重要である、ということを知っているからである。正直で透明なビジネスのやり方をしているという評判は安定した持続的な固定客の基盤を確立する。このような評判は、自動車修理業者はハンセン病者を雇用しているとか、ハンセン病の抱える偏見を含む他のすべての検討事項より優先されるのである。

これらの訓練校はまた、「ウブントゥ」の原則に従って運営されている。すなわち、就職担当官及び同窓会を通して、学校は相互支援関係のネットワークを構築しているのである。

権利条約と新しい CBR ガイドラインは、障害に対する私たちの見方にパラダイム・シフトをもたらした。というのは、これらは、「相互支援関係の文脈の中で」、障害者を、障害者自身に変化をもたらす主体であるとしているからである。これは、障害者は今や自力で独力ですべてを行うことが期待されているということではない。大切なことは「ウブントゥ」の考えの中にうたわれている—もしほかの人が傷つけば、私も傷つく。私たちは、互いに助けあうことは完全に私たちのためになるという共通の人間性の一部である。

この点は何世紀にもわたって草の根レベルの人たちに理解されてきた。しかし、私たちはいかにしてこの考えを政府の政策の中に確立させ、あたりまえのことにできるだろうか。

政府は本質的に敏感に反応する、すなわち、市民・国民からの圧力に反応する（少なくとも民主主義国家においては）。そこで、このような圧力かけるのは国民の義務である。公正な社会の構築は政府と市民との合同責任である。市民からの圧力には様々な方法がある。英国では、ちょうどオリンピックとパラリンピックが開催されたばかりだ。英国（及び他の地域）で障害を目にするパラリンピックの影響は計り知れないものだった。競技場は満員だった。100メートル走の決勝を見るために 400

万人がチャンネルを合わせた。マスコミはメインのオリンピック競技大会と同じ位広く報道した。競技会場で起きたことは主要なニュース番組のトップを飾った。英国にいる多くの人にとって、パラリンピックはメインのオリンピックよりも刺激的で面白いものだった。私たちは突然、障害者が驚くべきレベルの身体適合性と運動能力を達成する光景を目にした。ある車いすテニスの選手が言うように、「障害者が出来ないことは何もない」のである。

しかし、1948 年英国における第一回パラリンピック競技大会以前は、脊髄損傷者は数年の寿命しかないと見なされ、人生残りの日々をできるだけ安楽に過ごさせることとされていたことを、私たちは忘れてはいけない。私たちはこの 60 年の間にどれほど計り知れない距離を進んだことか。リハビリテーションという非常に限定的な概念に基づいた障害の捉え方から移行し、障害者は完全な参加者であり変化をもたらす積極的な主体として見られるようになったのだ。

パラリンピックは先進国における非常に劇的なピープル・パワーの一例だが、グローバル・サウス（事務局注：アジア、中南米、アフリカ、中東の途上国）の各国には、草の根レベルの障害者が社会開発政策や実践に大きな影響を及ぼしている例が多数ある。

一例を挙げると、ウガンダのデイビッド・ルヨンボは、私がこれまでであった誰よりも「ウブントウ」、「三方よし」、及び権利条約の原則、並びに CBR ガイドラインを実証している人物である。

デイビッド・ルヨンボの話

デイビッドはカンパラから車で西に三時間ほどのマサカにある農業研修センターを運営している。ここでは革新的かつ持続可能な技術を活用して畜産及び作物生産の短期コースを実施している。事の発端は注目すべき話である。

デイビッドは幼い時小児まひになった。そもそも母親が主張したことから教育を受けるようになった。小さい時は母親が抱えて学校に連れて行き、成長してからは母は彼が自分で登校することを主張した。彼は頑丈な棒を松葉づえ代わりに使っただろうじて歩くことができる。（父親は障害が原因で彼を拒否した。）

中等学校終了後、デスクワークだからという理由で、カンパラで会計士としての訓練を受けた。しかし彼は会計士にはなりたくなかった。自宅のあるマサカの農村地域で障害者の発展のために働きたかった。

彼は農村地域で障害者が必要とするのは、他のみなと同じように農業技術であると考えた。障害者に手工芸を教えても自給自足は出来ない。そこで、地元 NGO の支援の下、マケレ大学で動物看護師の訓練を受けた。

1990 年、独力で障害者の動員に着手した、しかも自転車で（小児まひのために自転車に乗るのが困

難であるにもかかわらず)。彼は自宅地区の農村地域を自転車で回り、障害者のいる家族を特定しようとした。単に個人ではなく家族に焦点を当てたのには二つ理由があった。まず、場合によっては障害者が子どもで収入を得る準備が出来ていない、もしくは障害が重すぎてできない人がいたため。次に、家族全員を巻き込むことで、障害者は負担ではなく役に立つ人と家族が考えられるようになるためである。

デイビッドは良質の乳牛、山羊、豚、七面鳥、そして鶏を飼い、障害者とその家族に優れた畜産の方法を訓練し始めた。彼はこれらの家族に、最初に生まれた子を彼に引き渡すという条件で動物を与えた。別の家族にあげることができるからである。

デイビッドは、優れた畜産の訓練をするためにはモデル農場、及び、数日間続く訓練課程に参加できる宿泊設備付きの研修センターが必要であるということを早い段階で実感していた。農場では乳牛、交雑種の山羊と豚、良質の七面鳥と鶏が、良く作られた囲いの中で飼われていた。その結果、研修センターは今では障害者、非障害者双方にとってウガンダ全体の農村開発のための資源となったのである。

デイビッドから学ぶべき教訓

- デイビッドは農村地域の農家にとって最も収入源になることを特定した。つまり、手工芸ではなく家畜である。
- 彼は個人とではなく家族と活動している。
- 彼は障害者のロールモデルとして行動している。
- 彼は大きなビジョンを持っているが、最初は小さなことからスタートした。
- 彼は実技指導をしている。
- 彼は障害を他の開発問題に結びつけた。
- 彼は自分たちの仕事を障害者と関連づけたことがないメインストリームの開発に携わっている人の注目を引いた。

デイビッドの持つエンパワメントの感覚は、自分自身だけというよりも他の人を助けたいという熱望に反映されている。彼が人生で成功しているのは、発展一すなわち人の、障害者の、自分の地域の発展一に対する強い願望があるからである。そのため彼は、創造的・肯定的に考え、計画し、仕事の改善方法を絶え間なく模索している。当初は周りの人は彼に対して懐疑的だったが、今では彼を信じており、彼はより広い農村コミュニティの発展のための原動力の一つとなった。

デイビッドの障害は今となってはほぼ無関係である。むしろ、彼自身の、そして彼のコミュニティの変革のきっかけになっている。

最後に—CBR と CBID は支援的關係性のネットワークを構築する戦略である。「開発とは、社会共通の利益のために関係が強化されていくなかで進んでいくものである。」ジンバブエのオフア、インドの職業訓練校、そしてウガンダのデイビッド—これらすべてが、「ウブントゥ」や「三方よし」のような

伝統的価値観がまだ残っていて、CBR や CBID の中心部をなしているということを思い出させてくれる。

◆ 質疑応答とバズセッション

高嶺 コールリッジさん、貴重な講演、ありがとうございました。次は質疑応答の時間を取らせていただいております。最初に質問をお受けする前に、ピーターさんのお話を聞いて、隣の方、前、それから後ろの方を含めて3、4人の方とバズセッション（振り返り）をしたいと思います。どういうことで感銘を受けたかということを含めて、4、5分、自己紹介も兼ねてお話をしてもらって、その中で、その後にグループからでもよろしいし、個人の方のご質問をお受けしたいと思います。その後、ご質問について、まとめて、ピーターさんのほうにお答えいただきたいと思っています。これを11時25分までに完結したいと思います。それではお隣同士、少し今日のお話を聞いて、感想も含めて、よろしくをお願いします。

(バズセッション)

高嶺 時間がまいりましたので、バズセッションのほうを終了したいと思います。このセッションの中で、ピーターさんにこの点をもう少し説明してもらいたいということも含めて皆さんの質問をお受けしたいと思いますけれども、今、質問を言ってもらって、後でピーターさんのほうにはまとめてお答えしてもらいたいと思いますけれども、いかがでしょうか。ご質問がある方、手を挙げてください。グループでお話されたことでもいいし、なんでも質問していただきたいと思いますが、いかがでしょうか。はい、どうぞ。

会場 お話をどうもありがとうございました。今日のお話を聞いて、大変新しい視点というものがあることに気がついて、とてもうれしかったです。

ピーターさんは、伝統的価値ということを非常に大切に話されました。そしてその中で伝統的価値のいい部分、助け合いとか、そういういい部分について、ポイントを置かれて話しておられましたけれども、伝統的な価値の中には、たとえば障害は神様の罰であるというようなスティグマにつながるようなネガティブなものもあると思います。伝統的価値とだけ言ってしまうと、ポジティブな面とネガティブな面と両方を交錯してしまうような気がするんですが、そのへんはどういうふうに考えておられるか、お聞きしたいと思います。ありがとうございました。

高嶺 はい、ありがとうございました。他にいかがでしょうか。はい、どうぞ。

会場 個人的な質問というよりは、4人で今、どんな話をしたかということをお話したいと思います。まず全員が思いましたのが、今日のお話を聞いて、障害のある方というのはパワーがあると。そして最後のウガンダの例の方も、障害があることが変革のきっかけになったというのが大変印象深かったことと、それが今後日本でも、さらに鍵となるような形でコミュニティが動いていくといいんだが、ということです。むしろ、障害者の方が中心になって案を出していただいたりすることがあれ

ばいいのかなと思いました。そしてまた、生計を立てるということに主眼をおいてやっていかれるというのは、大変参考になりました。今日グループの中でディスカッションがあるそうですが、問題は国を超えても同じであると思うと、こういう障害者の問題が埋もれてしまわないようにするために、どうしたらいいのかというのは非常に難しいと思っています。

もう一人の方は、三方よしとか、ウブントゥは、非常にすばらしいけれども、これを持つ時、狭い地域ではなく、広いレベルで広げていくということはなかなか難しいというご意見でした。

高嶺 ありがとうございます。それではもうひと方、いかがですか。

会場 今日はお話をありがとうございました。僕達4人で話し合ったのは、日本のように、伝統、いわゆる人と人との結び付きが希薄になったような場所に、もう一度パワーを戻すということ、どうやっていったらいいのかというところをお聞かせいただきたいということです。

もう一つ、一番最初に質問された方に関連しているんですけども、非常に偏見の多いと思われる知的障害や精神障害の方達に「生計」を探すということに関して、事例をご存じでしたら教えていただければと思います。

高嶺 はい、ありがとうございます。それでは今のお三方に対して、ピーターさんからお話をお願いします。

コールリッジ それでは、今日の午後に、またさらに議論する時間があるかと思しますので、ここでは短くお答えしたいと思います。

まず1点目。この伝統的価値のネガティブなポイントについて。それはどういうものであるかということは、皆さん、よくわかっていると思います。けれどもウブントゥというのは、とてもポジティブな面です。そしてこれが今でも活発に活用されているというのは、それが持続可能だからです。

私達がこれに焦点を当て、強調するのは、文化を忘れてはならないという理由からです。CBR プログラム多くは、コミュニティの外からやってきます。つまりよそ者が自分達の考えをもって入ってくるということです。けれども開発というのは、そういうものではありません。開発というのは、人々が自分達の問題を解決するための強み、そして知恵を見つけることです。そのよそ者、アウトサイダーというのは、ファシリテーターなどとして、何かをきっかけに促進する立場にはなるかと思えます。

けれども一番の役割というのは、聞くこと、耳を傾けることです。そのコミュニティで、何がポジティブなのかということを見きわめ、その上に物事を積み上げることです。そのプロセスを実行することで、このネガティブなものを脇に追いやり、ポジティブなものをそのまま存在させることができます。

けれども地元で元々ある文化を否定した場合、私達が持ち込んだものもポジティブなものにはなりません。つまり持続可能ということは、まずそこにいる人々がその考えを信じて、そしてそれをやり続けたいと思うことが大事なのです。それが1点目のお答えです。

これに関しまして、また午後にお話があるかと思えます。これはとても重要かつ興味深い点です。

2点目の感想ですが、幾つかの面があります。まず1番は、どのように政府の政策を変えるかです。そしていい考えをどのように拡大するか。これに関しては、先程言いましたようにポジティブなプレッシャーというのは、ネガティブなプレッシャーよりも効果的です。

私はパラリンピックがエリートの活動だということはわかっております。けれども、パラリンピックは、障害に関してとてもポジティブな見方を提供しています。そしてそれぞれのコミュニティにおいて、障害者がどれだけ活躍できるかということ、オフアや、デイビッド、インド職業訓練校などのように、こういうことができるのだということ、デモンストレーションしていかなければいけないと思います。

インドの自助グループですが、1980年代に最初に立ち上がった時は、なんの政治的な力もありませんでした。けれども今では何百、何千とありますので、それぞれの地域や州単位で、連盟のような組織を築くことができるまでの力になりました。

そこで政府、政治家も彼らに関心の目を向けるようになったのです。つまり、聞かなければならない声を、彼らが上げるからです。そこで彼らは今では政治的な力を持つようになりました。彼らは自分達ができることを小さいところから始め、それが各地に広がり大きな連盟などの協力体制を作ることになり、全体として大きくなったのです。

3点目の質問は、日本においては伝統的な価値が薄れてきて、どうしたらそれを強められるかということでした。これはイギリスや他のヨーロッパの国でも同じ状況です。それに関しては、障害についてだけではなく、環境とか財政面、そうしたことについてもルーツを探していかなければなりません。政府は自分達だけでは問題を解決することはできません。

先程プレゼンテーションの中でも言いましたけれども、人々が自分達の権利を獲得し、社会をより良くしていくというのは、市民と政府との共同作業です。ですので、障害、環境、金融関係、金融システムとか、そうした全ての分野において、まずは自分達のものでやっていくということが大事です。

そして人々がそれぞれの分野において何かやっている、動員されているのを見れば、政府も注目するようになります。これはとても大きなトピックですので、また午後に、さらに話を深める必要があるかと思えます。

もう一つのご質問というのは、知的障害の人達の状況はどうしたらいいかということでした。それは本当にその通りです。そしてまた、それも大変難しいものですので、できればそれに対する答えは、今日の午後に持ち越させていただきたいと思えます。けれども、これに関しまして、がっかりすることはないと思えます。というのは、知的障害のある人達が仕事を得たり、成功している例は世界各地に数多くあるからです。

最後にまとめとして言いたいのは、私達は、「インディペンデンス」、自立ということをお話しているのではなく、「インターディペンデンス」、つまり相互に依存する、お互いがお互いに依存すること、それについて話し合っているのです。つまり私達は、お互いに支え合っているのです。

以上です。

高嶺 ピーターさん、明解なご回答ありがとうございました。今日の午後のディスカッションのネタがたくさん出てきました。それでは最後にピーターさんを拍手で感謝をして、それから休憩を取りたいと思えます。ピーターさん、ありがとうございました。

Paper presented at Japanese Society for Rehabilitation of Persons
with Disabilities(JSRPD) Conference 2012

Traditional value systems and community based approaches to disability and livelihood.

Peter Coleridge

'Development is what happens when relationships strengthen for the common good.'

5

Introduction

I am very privileged to be invited to speak at your conference here in Tokyo. I have come from the other side of the world, and to bring someone so far immediately raises large expectations. I feel humbled and deeply honoured by this invitation.

My experience in working in disability has been entirely in developing countries, in particular, the Middle East, Afghanistan, India and Southern Africa. I do not have any experience of working in disability in an industrialised country where there is a well developed welfare system. But what I have to say is, I think, relevant to both industrialised and non-industrialised countries.

My experience goes back more than 30 years, and in that time there have been major changes, in attitude, in policies and in practice. Over the past decade or so I have focused on disability and livelihoods, and was the lead author for the chapter on livelihoods in the WHO *CBR Guidelines*, published in 2010. So I have chosen to speak about livelihood within the context of inclusive development.

The UN Convention on the Rights of Persons with Disabilities

When I survey the landscape in disability over the past 30 years, the UN Convention on the Rights of Persons with Disability (CRPD) stands out as a fundamental paradigm shift in attitudes

⁵ Malcom MacLachlan, Stuart Carr, Eilish McAuliffe (2010): *The Aid Triangle. Recognizing the Human Dynamics of Dominance, justice and identity.* Zed Books.

and approaches to disability. Persons with disabilities are not viewed as *objects* of charity, medical treatment and social protection, but rather as *subjects* with rights, who are capable of claiming those rights and making decisions for their lives. The CRPD views disabled people as agents of their own change, and it envisions an inclusive society.

There are two things I would like to say about the convention. The first is that, while it is a major achievement, it will not change the lives of disabled people just by its existence. People cannot live on rights and legislation; they do not develop by an act of parliament.

⁶ An implementation strategy and process is required. The Convention is a set of standards that need to be implemented through policy and practice.

The second thing is that the idea of an inclusive society is not new. A main point of this talk is to draw attention to the traditional value systems in many countries, including Japan, where a fair, inclusive, humane society has been an essential part of traditional value systems. In this talk I am going to draw connections between traditional value systems and the CRPD, Community Based Rehabilitation (CBR) and Community Based Inclusive Development (CBID). In industrialized societies we have largely lost sight of these traditional value systems, and these three tools, CRPD, CBR and CBID, can reawaken in us the age-old, profound ideals that are essential to our humanity.

The main driving force behind the CRPD has been the mobilisation of disabled people themselves. Their determination and persistence as a rights movement has had an enormous influence on public attitudes across the world. Where attitudes have changed most significantly is in the rehabilitation process, especially in non-industrialised countries, where CBR has become the dominant strategy for working with disabled people.

CBR and CBID

As attitudes have changed, CBR has itself gone through its own evolution. Whereas at the beginning in the early eighties it was primarily focused on rehabilitation, it is now viewed within a much wider framework: it is a multi-sectoral strategy to address the broader needs of disabled people, ensuring their participation and inclusion in society and enhancing their quality of life. CBR is now primarily about rights, poverty alleviation, and making inclusion a practical reality.

⁶ *Cornielje, H & Bogopane-Zulu, H. The Implementation of Policies in Community Based Rehabilitation (CBR) in Hartley et al. CBR Policy Development and Implementation UEA, (no date, but post 2006)*

This radical change from rehabilitation to inclusion has given birth to the concept of Community Based Inclusive Development (CBID). Community Based Inclusive Development is a way of describing positive, mutually supporting relationships. Taking a close look at livelihood is a good way of illustrating what I mean by positive, mutually supporting relationships, which have been at the heart of age-old traditional value systems.

What does Livelihood mean?

Exclusion from economic activity is probably the prime reason for discrimination against disabled people in poor countries. Disabled people have lower employment rates and therefore are generally poorer than non-disabled people.

Work and employment are a crucial part of a person's identity and self-image. We all have a built-in desire to contribute, to make a difference. It is also the way in which we are valued by our families and society.

Livelihood does not only mean employment or income. It is the way in which we organise our lives not just to survive but also to flourish – as human beings with desires and aspirations.

Can we measure poverty only in economic terms? Poverty is not simply lack of income; it is a denial of the fundamental freedom and opportunity to develop as a human being. The elimination of poverty lies in the creation of a just society in which **all** citizens have equal opportunity to develop their full potential.

There is a wide variety of ways CBR is implanted across the world depending on historical, cultural, political, economic, geographical, and many other factors⁷, but the common thread is that CBR is a practical strategy for creating equal opportunities. In some countries it also shows strong linkages with traditional value systems.

Consider the example of **Opha in Zimbabwe**.

Opha is a wheelchair user who sells fruit in the market in Bulawayo, Zimbabwe. Her husband left her because of her disability, and she has no children of her own. But she supports a niece to go through school.

She buys her fruit from a wholesaler, transporting one crate at a time on her lap in the wheelchair.

⁷ *Ibid.*

Her earnings are about \$50 a month.

She belongs to a range of community groups, including the local disabled people's organisation, a church group, a savings group, and a residents' association.

The first thing that strikes you about Opha is her happiness. She is smiling, positive, and outgoing. There is no complaint. She lives her life with a sunny, optimistic spirit.

The second thing that strikes you is that the price of her bananas is twice as high as her neighbour's in the market. How can this be?

The answer is *ubuntu*. *Ubuntu* is a concept used in South Africa, and the same concept is also used in other countries of southern Africa under different names.

Desmond Tutu, a well-known South African leader, describes *ubuntu* as follows:

"A person with ubuntu is open and available to others, affirming of others, does not feel threatened that others are able and good; they are based on a proper self-assurance that comes from knowing that he or she belongs in a greater whole; they feel diminished when others are humiliated or diminished."

'If others are diminished, I am diminished.' We belong to a greater whole. We are not just individuals. We are part of a common humanity. There is connectivity between all of us.

What makes us human? I am a human because I belong. I participate. I share. In essence, **I am because you are.** I take my own meaning as a person from my relationships with those around me, and indeed from my relationships with the rest of mankind.

But increasingly as industrialization has progressed we have lost sight of this ideal and we think of ourselves as individuals.

Opha sells her bananas at a higher price than her neighbour because the principle of *ubuntu* still operates in Zimbabwe. She has a network of people who support her, and they are happy to pay more for her bananas simply because they are part of her support network.

Ubuntu also operates among the market traders. If Opha leaves her stall to go and collect fruit from the wholesaler, her neighbour looks after it. The market traders all help each other. This gives a totally different view of 'market forces' than the one presented by modern economists, who see the market as primarily competitive.

Opha says: *"I fear God. I do not use money recklessly. I have an eye for detail. I make friends with my customers. If I am regarded as successful it is because of these things."*

But the real key to her success is that she does not sit at home 'demanding her rights'. She is proactive, and approaches life with a positive and optimistic frame of mind. She reaches out to people, she makes friends, she gives, of herself, of her time, of her very limited money. She is part of a wide set of mutually supportive relationships.

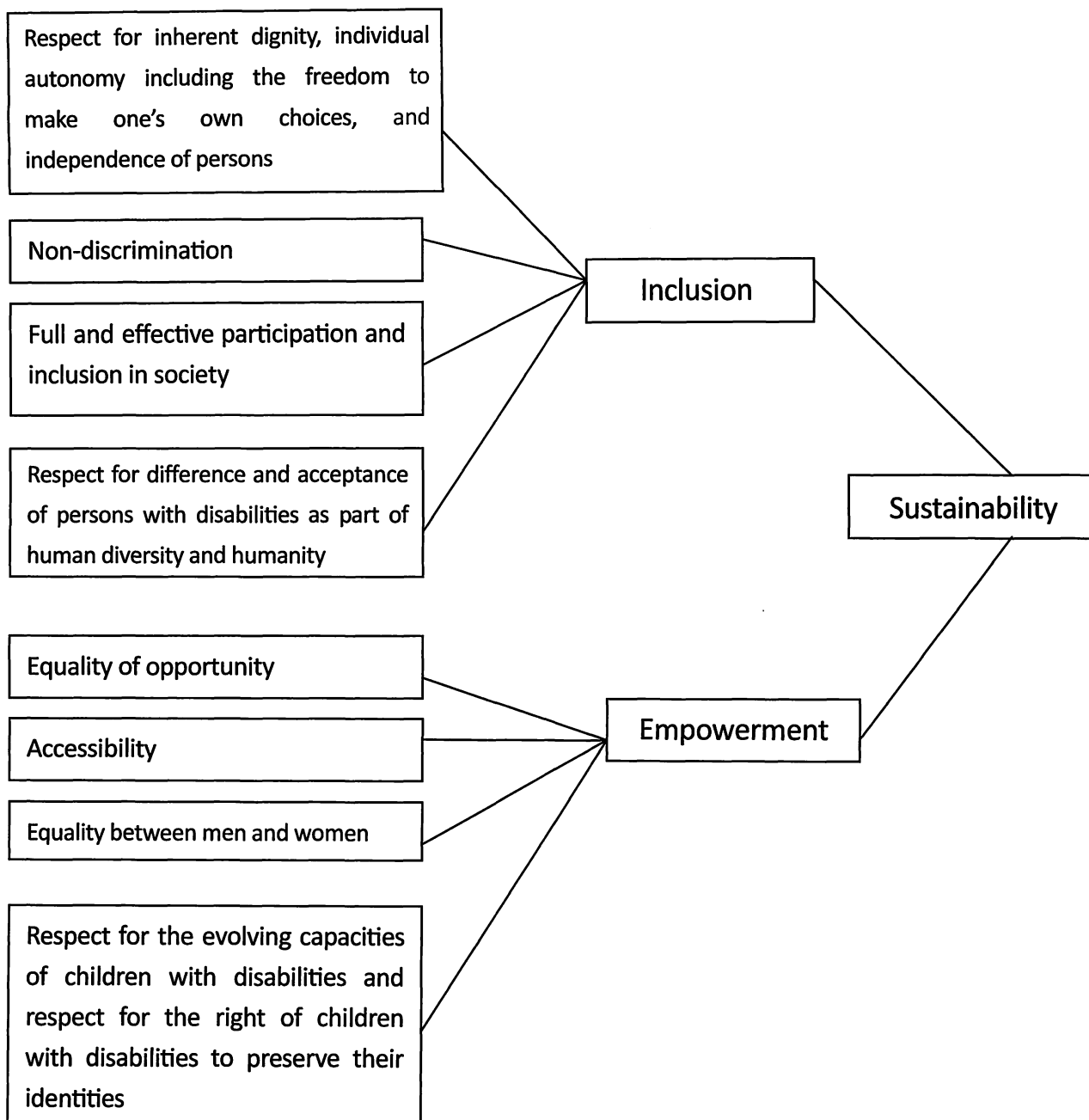
Opha earns \$50 a month. But is she poor?

The principles of the CRPD and CBR.

Let us remind ourselves of the principles of the CRPD.

1. Respect for inherent dignity, individual autonomy including the freedom to make one's own choices, and independence of persons.
2. Non-discrimination.
3. Full and effective participation and inclusion in society.
4. Respect for difference and acceptance of persons with disabilities as part of human diversity and humanity.
5. Equality of opportunity.
6. Accessibility.
7. Equality between men and women.
8. Respect for the evolving capacities of children with disabilities and respect for the right of children with disabilities to preserve their identities.

Eight principles are perhaps hard to remember. But they can be summarised in two words: **inclusion** and **empowerment**. And CBR, while adopting all the CRPD principles, adds **sustainability**.



These principles can also be summarised in one word: **ubuntu**. CBR is, at its best, a network of supporting relationships which provide purpose and value to the lives of all those concerned, not just of disabled people. The best CBR programmes:

- Involve multi-disciplinary teams, and/or staff trained in all aspects of disability and rehabilitation.
- Have staff who are aware of their own limitations and know when to refer to specialists.
- Develop programmes that are based on needs as expressed by the client groups.
- Train their staff in community development as well as technical skills.

- Recognise that CBR cannot exist in isolation; CBR is complementary to mainstream services and to more specialist services offered by various rehabilitation professionals.⁸

Here in Japan you have the concept of *sampo yoshi*, the theme of this conference. It will be explained further by others later, but in essence it means that tradesmen and craftsmen know that if they make a good product, people will want to buy it. If people buy it, the tradesmen make money, the customers are happy, and the community benefits. It is based on high quality workmanship and transparent dealing with customers. It is win-win-win all round.

Let me illustrate *sampo yoshi* by an example from India.

Leprosy Mission VTCs in India.

The Leprosy Mission runs a number of vocational training centres in India for young people who have leprosy, or whose parents have leprosy. Nowadays leprosy can be completely cured with drugs but the stigma remains very strong.

These VTCs train young people in motor mechanics, carpentry, electrical fitting, tailoring and the other vocational skills that VTCs teach all over the world. Many VTCs around the world have a rather poor record of employment for their graduates. But 90% of the graduates from the VTCs run by the Leprosy Mission in India find employment within a year of graduating.

Why? There are three reasons.

First, these VTCs focus not just on the technical skills but on life skills.

It is not enough to learn motor mechanics. To be successful in employment one also needs to have:

- Determination
- Aspirations
- Social responsibility
- Willingness to take risks
- Optimism
- Friendliness
- Persistence in the face of set-backs

⁸ Adapted from Cornielje & Bogopone-Zulu.

- Creativity
- Openness to other views
- Critical thinking
- High personal standards

And these qualities can be taught, by example, by role models, and by creating a culture in the training centre where these values are demonstrated and prized.

Second, these VTCs have placement officers, whose job it is to develop relationships with potential employers and place graduates. Once a company has seen that graduates from these VTCs have so many valuable personal qualities besides their technical skills, they do not need persuading to take more.

Third, the schools have vibrant alumni associations, where previous graduates, now in jobs, can support younger graduates in finding and keeping employment.

These three factors, life skill training, placement officers, and alumni associations, are the secret of the success of these training schools. It is win-win-win all round. The graduates are happy because they get jobs, the employers are happy because they have people who can be relied on to do a good job both from a technical and a human perspective.

These schools operate on the basis of *sampo yoshi* because they know that training is more than just technical skills, that operating a successful car repair shop requires more than knowledge of motor mechanics: relations with customers and relationships within the workforce are equally important. A reputation for honest and transparent dealing in business will establish a secure and sustainable customer base. This reputation overrides all other considerations, including the fact that a car repair business employs people with leprosy, with all the stigma that that carries.

These schools also operate on the principle of *ubuntu*: through their placement officers and the alumni associations they build networks of mutually supporting relationships.

The CRPD and the new CBR Guidelines mark a paradigm shift in our view of disability because they see disabled people as agents of their own change, *within a context of mutually supporting relationships*. It is not that disabled people are now expected to do everything on their own and by themselves. The point is enshrined in the idea of *ubuntu*: if another human being is diminished, I am diminished. We are all part of a common humanity, in which it is entirely in our own interests to help each other.

The point has been understood by people at the grass roots level for centuries. But how do we establish this idea in government policy and make it common practice?

Governments are essentially reactive: they react to pressure from citizens (at least in democratic countries). So it is the responsibility of citizens to apply that pressure. The creation of a just society is a joint responsibility between government and citizens. Pressure from citizens takes many forms. In Britain we have just had the Olympics and Paralympics. The impact of the Paralympics on views of disability in Britain (and elsewhere) is incalculable. The stadiums were packed. Four million people tuned in to watch the final of the 100 metres. Media coverage was as wide as for the main Olympics. What happened in the arenas was headline news on the main news bulletins. For many people in Britain the Paralympics was more exciting and interesting than the main Olympics. We suddenly had a vision of disabled people achieving phenomenal levels of fitness and athletic prowess. As a wheelchair tennis player said, 'There is nothing a disabled person cannot do.'

But we have to remember that before the first Paralympic competition in Britain in 1948, spinally injured people were regarded as having a life span of only a few years and were to be made as comfortable as possible for their remaining days. What an enormous distance we have come in the last sixty years! We have moved from a view of disability based on a very limited concept of rehabilitation to one where disabled people are seen as full participants and proactive agents of change.

The Paralympics are one example of very dramatic people-power in an industrialised country, but throughout countries in the Global South there are many examples where disabled people at the grass roots have been able to exert major influence on social development policy and practice.

One example: David Luyombo in Uganda is a man who demonstrates more than anyone else I have ever met the principles of *ubuntu*, *sampo yoshi* and the CRPD and the CBR Guidelines.

The story of David Luyombo

David runs an agricultural training centre in Masaka, about three hours drive west of Kampala. It runs short courses in animal husbandry and crop production using innovative and sustainable techniques. How it all happened is a remarkable story.

David had polio as a small child. He got himself educated primarily because his mother insisted he did so; she carried him to school when he was small, but when he grew she insisted he got there by himself. He can walk with difficulty using a stout stave as a crutch. (His father rejected him because of his disability.)

After leaving secondary school he trained as an accountant in Kampala because it was a job that was sedentary. But he did not want to be an accountant. He wanted to work for the development of disabled people in his home rural area in Masaka.

He reasoned that in a rural area what disabled people need is agricultural skills, like everyone else. Teaching them handicrafts does not make them self-sufficient. So he trained as a veterinary technician at Makerere University, sponsored by a local NGO.

In 1990 he set out to mobilise disabled people on his own – by bicycle (despite the fact that polio made it hard for him to use a bicycle). He cycled all over the rural areas of his home district to identify families with disabled people. He focused on families, and not simply on individuals, for two reasons: first, in some cases the disabled person was a child and not ready to earn an income, or was too disabled to do so. Second, involving the whole family enabled them to see the disabled person as an asset, not as a liability.

He began to breed good quality cows, goats, pigs, turkeys and chickens, and to train disabled people and their families in better animal husbandry. He gave animals to these families on condition that they gave him the first offspring, which could then be given to another family.

David realised early on that to train people in better animal husbandry required a model farm and a training centre with accommodation, where people could come for training courses lasting several days. The farm has cows, cross-bred goats and pigs, and good quality turkeys and chickens kept in well-constructed pens. The result is that the training centre has now become a resource for rural development in the whole of Uganda, for both disabled and non-disabled people.

Lessons to be learned from David

- David identified the most obvious source of income for rural farming families: livestock, not crafts.
- He works with families, not with individuals.
- He acts as a role model for disabled people.
- He has a large vision, but started small.
- He works by demonstration.
- He has linked disability to other development issues.
- He has attracted the notice of people in mainstream development who have never linked their work with disabled people.

David's sense of empowerment is reflected in his ambition to help others rather than just himself. He is making a success of his life because of a driving aspiration for development – of people, of disabled people, and of his area. This leads him to think creatively and positively, to plan, to

continually seek ways to improve what he does. Initially people were sceptical about him; now they believe in him and he has become one of the driving forces for the development of a wide rural community.

David's disability is now more or less irrelevant. Or rather it has been a trigger for transformation, in himself and in his community.

To conclude: CBR and CBID are strategies for creating networks of supportive relationships. *'Development is what happens when relationships strengthen for the common good.'* Opha in Zimbabwe, the vocational training schools in India, and David in Uganda all remind us that traditional values like *ubuntu* and *sampo yoshi* are alive and well and are at the heart of CBR and CBID.

◆ 講演

東近江市の地域作りと地域福祉の取り組み

小梶 猛

(学校法人司学館校長、NPOしみんふくしの家八日市、建築士)

山口 美知子

(東近江市緑の分権改革課主幹)

野々村 光子

(働き・暮らし応援センター“Tekito-”センター長)

司会 それでは午前中の次の講演に移りたいと思います。いよいよ三方よしについてお話をくださる東近江の三人の方をお迎えいたします。このセッションの進行は、杏林大学の准教授の河野 眞さんをお願いいたします。

河野 それではよろしくをお願いいたします。「CBR vs 三方よし」っていう、ものすごいテーマの片側の三方よしについてのお話が始まります。このテーマについて簡単に述べさせてもらおうと、CBR と三方よしを「vs」で結んじゃってるんですけども、二つとも結局同じ山を登っているのではないかと思います。ピーターさんの発表の中で「CBID とは建設的な相互支援関係のことである」ということが言われましたが、まさに三方よしが目指している状態も、そのような状態ではないかと思うのです。

CBR に携わっている者と、日本の地域づくりに携わっている東近江の皆さんのやっていることとは、並べてみると響きあうというか、呼応しあうものがあるのではないかということで、このような内容のセミナーを今回企画させていただきました。

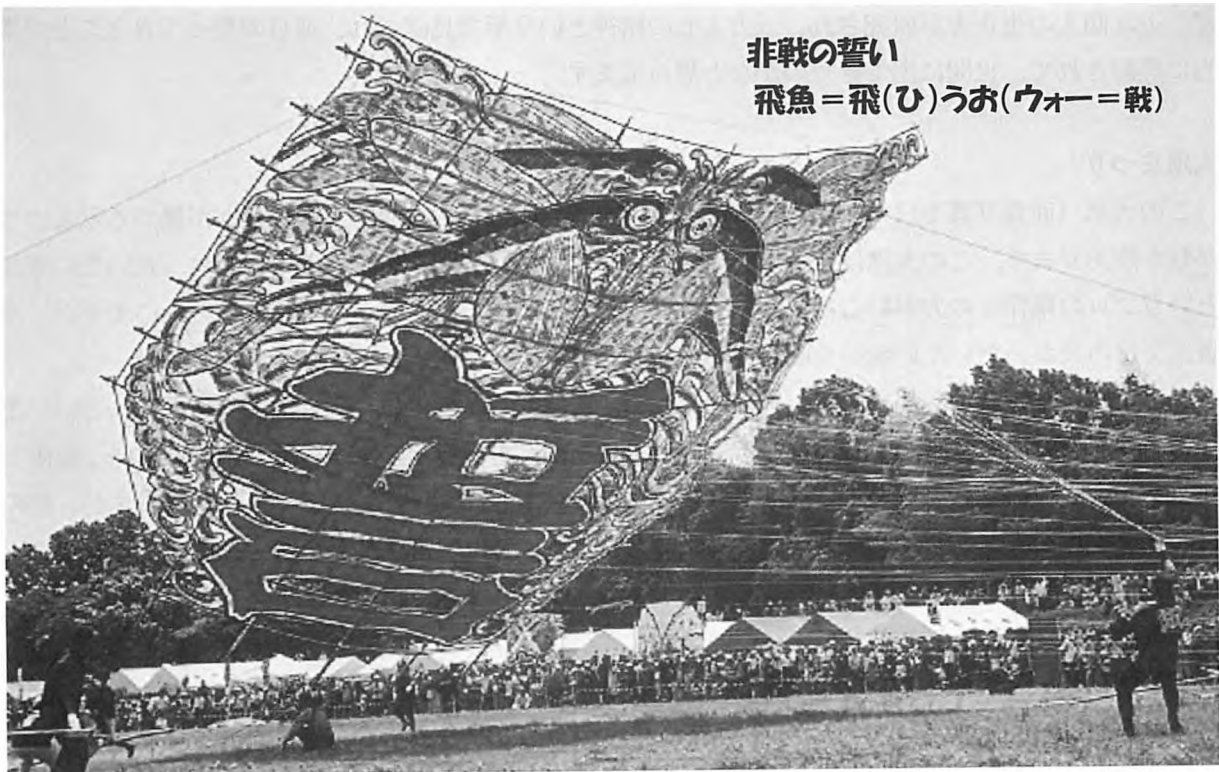
さて、これから東近江のお三方、小梶さん、山口さん、野々村さんにご発表をいただきます。皆さん、とても緊張されているといいますが、場違いな感じを持たれているとのことで、そんなことはないということをずっとお伝えしているところです。まず小梶さんから、大きな東近江の地域づくりのお話をしていただいて、次に山口さんから行政からの関わりの話をしていただき、最後に野々村さんから、特に三方よしの取り組みの中でも障害分野に関わるところをお話しいたします。

ピーターさんのお話にもありましたように、障害分野で、何か地域の中でやろうと思っても、必ず地域づくりとか地域開発について理解がないと、うまく進まないんだということがあります。そういう意味で、今、東近江で活発に地域の中で活動されているお三方の話は、必ず今回のテーマである CBR につながっているものと考えています。ですから、お三方には自信をもってお話をいただければと思います。すみません。長々失礼しました。お三人のプロフィールは資料の 25 ページ(本報告書65 - 66 ページ)をご覧ください。では小梶さん、よろしくお願ひします。

◆ 日本の千分の一スケールの東近江市における活動—小梶 猛
(学校法人司学館校長、NPO しみんふくしの家八日市、建築士)

小梶 皆さん、こんにちは。小梶です。よろしくお願いいたします。先程河野さんがおっしゃっていただきましたように、大変緊張しております。何か場違いなところにやってきたように思えます。ただ、先程の講演で三方よしという言葉が出てきましたので、少しその話をさせていただいて、僕のほうは終わりかなと思います。

近江商人



(写真1)

僕は、この(写真1)大凧祭りの実行委員長をやっています、県外に出る時にはいつも、必ずこの写真を遣ってPRしているんですが、今日はこの写真を持ってきて良かったなあと思っています。

私は滋賀県の東近江というところに住んでいて、近江商人というのは滋賀県出身の商人が東京、大阪で成功されておられまして。そういう方々を指して、近江商人と申します。近江商人の気質としてよく言われるのが、三方よし即ち「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」というものです。

どんなことかと申しますと、先程ピーターさんの話がほとんど正解なんですけれども。少し付け加えさせていただくと、たとえば物品の運搬について、今ではトラックを走らせた時に、往復で荷物を積むというのは当たり前のことになっていますが、近江商人が考えたのは、こちらの大坂近辺の産物を東京へ送る。その帰りの便で東京の産物を大阪近辺に持ってくる。それによって経費が省けて利幅も出てくるし、消費者にも安く提供できるというそれが「売り手よし」「買い手よし」なんです。そのことによって、大阪の近辺の産業が栄える、東京近辺の産業が栄える。これが「世間よし」ということです。

なおかつ、近江商人の気質というのは「始末してきばる」といい、要するに無駄遣いをせずに一生懸命働くというのが近江商人の気質ですから、お金が残ります。そのお金を、派手な生活で無駄遣いすのではなく、地域社会に還元していく。そのところが「世間よし」と言われている所以なんですね。

ただ、こんなふうに近江商人が良く言われるようになったのは、つい最近のことなのです。我々が子どもの頃、若い頃、30年、40年前というのは、差別的な言葉が入っているので許していただきたいのですが、近江商人とともに、お隣の三重県ですね、こちらも非常に多くの方が企業を興す方がいらっしやいまして。昔は「近江盗人、伊勢乞食」なんて言われ方もしたのです。特に近江を江州と呼んでいたので、「江州人が通った後には、ペンペン草も生えない」とさえいわれてきました。最近になって、近江商人の生き方が研究され、三方よしの精神という形で見直され、彼らのやってきたことが本当に理解されて、世間に出てきたのかなと思ってます。

大凧まつり

この大凧（前頁写真1）、100畳敷きの大凧です。全国で1年に1回、100畳敷きが揚がる凧まつりが数か所あります。この大凧は伝統凧といわれていますが、全国の伝統凧というのは、だいたい凧師というプロの凧作りの方がいらっしやいまして、その方が作ったものが基本的なものなのですが、東近江では市民が、だいたい延べ600人ぐらいかかって作るんですよ。

この大凧には特徴がありまして、凧の向こう側、透けてるんですね。あれは切り抜き工法といいまして、表面積で浮力は確保するけれども、力があまり綱にかからないように風が抜けるという技術であるとか。それからもう一つ、これは100畳のもので縦13メートル横12メートルありますが、縦の竹の骨を抜きますと、グルグルと巻いて筒状になります。昔はお宮さんとかお寺を使って作っていましたが、何日もかかる場合は雨が降ってきますよね。雨が降ってきたら、グルグルと巻いて収納しておけるという、そういった工夫がされています。

それからもう一つ大きな特徴は、判じ物と言いまして、凧に書かれた絵と言葉を組み合わせで情報を伝える。これ（前頁写真1）は「非戦の誓い」という凧なのですが、飛魚が描かれています。「飛ぶ」を「ヒ」と読みます、「魚」を「ウオー」、戦争と読んで、誓いという字をつけて「非戦の誓い」という判じ物にしています。

これが地域の中で作り続けられたということで、子どもから大人まで作るわけですが、地域ごとに絶えず大きさを競ったりしたことで技術の向上が繋がっていきました。作る過程の中で、子ども達が字を覚えたりとか、計算ができるようになったりとか。凧につなぐ細い吊り糸を凧元でまとめて太い綱につなぐのですが、吊り糸の長さの調整によって凧の揚がり方が違いますから、風の強さによって調整をします。そんなことをいろいろ研究した結果、だんだんと大きくすることができて、今までは最大で240畳の凧が揚げられました。

この地域では、そういうようなことが行われていますが、東近江以外のあちこち、いろんな行事や祭りがあり子どもたちはそんな中で育っていきます。たとえば近江商人の初めは丁稚奉公をします。先程の職業訓練校の話の中で、フォーマルな技術だけじゃなしに生活面や様々なことが一緒に教えられていると聞きましたが、丁稚奉公しても、読み書きそろばんだけじゃなしに、その仕事の段取りであったり、進め方みたいなものが、様々な行事や祭りの中で身につけていたのではないかと推察しています。そこで頭角を表して、こういうふうな近江商人が生まれてきたのではないかなと、輩出した

のじゃないかなというふうなことを考えています。

そうした風土のある東近江で、私たちはいろいろな活動をやっていますが、先程のピーターさんの話を聞いて、なんか方向が見えてきたなという話を三人でしておりまして、本当に今日は呼んでいただいて、ありがたかったなと思っています。

もう1枚(写真2)。これは心身健やかという凧ですが、龍が書かれています。龍は「たつ」という字になりまして、これを「辰」といいます。「辰」が二つで「辰(しん)辰(しん)」、「心身健やか」という、こんな凧です。時間が足りませんで、ちょっと予定して



(写真2)

いた話よりも、この部分だけでも紹介したいなと思いましたが、入れさせてさせていただきました。

東近江市での活動

我々、何をやっているかという、この話は後で山口さんのほうから、詳しいことは言われるかもしれませんが、東近江市は、人口、面積にしても、いろんなことで、日本の1000分の1のモデルがあると。ここでの成功モデルは、日本で展開しても成功するのではないかと、様々な活動を実験的にやっていくということが一つあります。

私は元々建築士として、福祉の専門家ではないのですが、26年前に日本が高齢化社会になるということを初めて知ったんです。そこですぐに、何かやらんとあかんということで、たぶん介護が課題になるだろうと。その中で市民がどう関わっていったらいいかなということを考えて、すぐにNPOを作って、まず介護の問題を考えました。ところが高齢化自体というのは介護だけじゃないんだと。少子化という課題にも同時に取り組まなければということで、その支援もNPOの事業として関わっています。

そんな中で、地域の人が地域の人達のことを互いに支援しあわなければならないということで、それぞれの地域にNPOをたくさん作ろうということで、NPO支援をやり始めました。自分達の生活の中で、暮らしの中で気づいた必要なサービスを、我々自身が始める活動です。

また、我々も近い将来、必ず死ぬのですが、医療体制がどうなってるのかと考えた時に、よく分からなかった。じゃあ皆で一緒に考えましょう、ということで、「市民が考える医療フォーラム」という

のでやらせていただきました。ここで私達市民と、それから医療関係者、専門家そして行政ですね、その人たちが一緒になってやれば、かなりいろんなことに可能性が見いだせるなどということを感じました。こういうことから、私としては、後で出てくるいろんな活動の発端になったのかなと。今までやってきたものが、少し社会化してきたのかなという気がしています。

その中で出てきたのが、三方よし研究会。これが当初は脳卒中の地域連携クリティカルパスの運用をどう進めるかという研究会だったんですが、この研究会に多職種の方が集まってきて、今ではだいたい150人ぐらいの医療関係者、福祉、介護関係者、市民、行政など、様々な業種の方が一緒に活動しています。ここで最大のテーマというのは、脳卒中の人たちもリハビリで回復したら必ず地域に帰るといことで、その人たちを含め我々もどんな形で地域でのターミナルを迎えるのか、そのための暮らしをどうしていったらいいか、みたいなことが話題になっております。

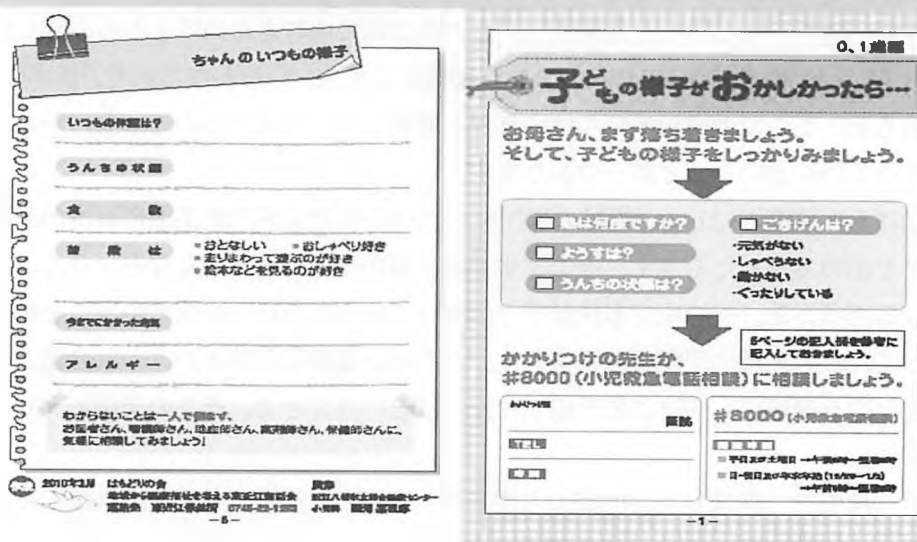
三方よし研究会の進め方というのは、顔の見える関係。必ず自己紹介を始めてやるということで、一人一人のつながりを大切にしていこうという、こういう活動ですね。

懇話会から生まれた活動

もう一つは、その関連で、地域から医療福祉を考える東近江懇話会というのができまして、ここでもいろんな業種の方々に集まっていただきました。その中で訪問看護関係者、介護事業者、医療関係者、宗教家、行政と市民が一緒になって研究会を進めているわけですが、地域に何が起きているのか、そしてあるべき姿はどうかということと一緒に語り合っ、やっています。

地域で何が起きているのかを一緒に考え、これを解決するため必要と思われる資源を把握したうえで、誰かを悪者にして結論を出さない。そんなことを言いながら、それぞれの委員で、できることからやっというふうにしています。委員の中に図書館長がおりまして、彼女は自分の図書館の中に医療情報コーナーを作りました。それで、今、約8000冊ぐらいの蔵書ができるということです。そこに委員さんの中で、小児科医とか病院の先生方が協力して、病院の図書館とつないだりとか、それから圏域内の介護施設やったりとか、医療施設の情報誌がここで全部集まるようになりました。

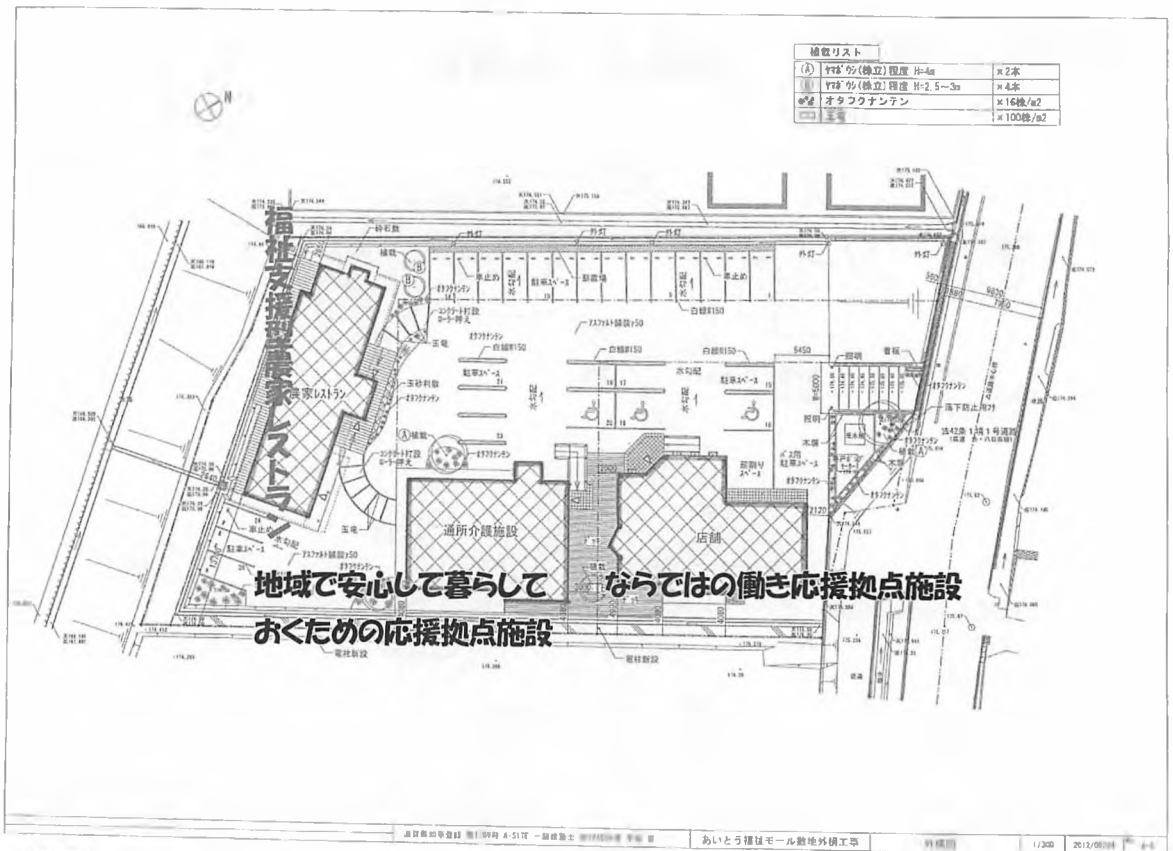
それから子どもを持つお母さんの委員さんは、仲間達と勉強を始めました。ここにはメンバー



(図1)

である消防士が出ていって、講師として救急にかかわる話をしたり、また小児科医が出ていって、季節的に起こりやすい疾病などの知識を講義するといったこともなされています。お母さん達が力を合わせて、子どもの様子がおかしかったらというような、こんな冊子(図1)を作ったんで

それから地域で安心して暮らせるような、こういう複合的な施設を作ろうということで、愛東という小さな集落に限って、誰もが安心して生活しながら、農業後継者もちゃんと育てられる、そういうふうなシステムづくりを、先程のマンガの中から、これ(図3)が生まれてきてまして、今年の3月には、たぶん完成するであろうということで、もう既にこういう形で工事が進んできております。高齢者のデイサービスを中心とした施設、それから障害を持つ人達の働き場、それから地域の高齢者と互いを結ぶ農家レストラン、そんなものが完成をしています。



(図3)

その施設にはソーラーを入れたりとか、薪ストーブを入れたりとか…。ソーラー発電で得た利益は、ソーラーに出資していただいた人たちに還元しますが、8割をだけを返していこうと。2割は地域のために使わせてくださいとお願いしています。また還元する8割も地域の商品券を利用して、東近江市内の商業が活性化するような。そんな活動を今始めて、そんなつながりができております。

私は、今、東近江全体で起こっていることのお話をさせていただきました。どうもありがとうございました。

河野 小椋さん、ありがとうございました。私の説明が足りなかったのですが、資料の中にA3の横位置の東近江魅知普請曼陀羅(折り込み図)という紙があります。これが今、東近江市の中で展開されている様々なNPOの活動や、プロセスの回っている状態を示しています。ものすごい量の活動があるのが、よくわかると思います。その説明を今のわずか15分ぐらいの間でもらおうと思ったの

ですが、ものすごい情報満載で、いろいろ、あれ、これはなんなんだろう？と思われたこともいっぱいあると思いますが、また午後にもゆっくり質問していただければと思います。

では山口さん、お願いします。

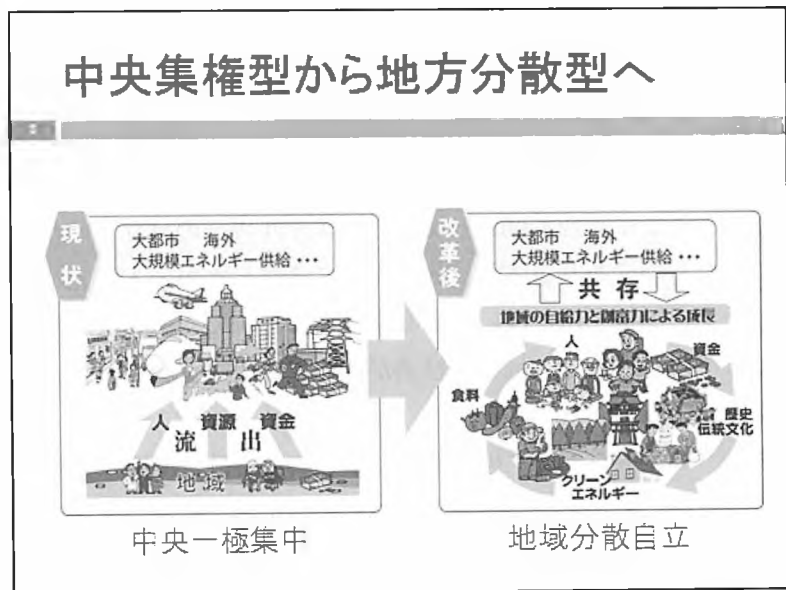
◆ 東近江市が目指す緑の分権改革—山口美知子（東近江市緑の分権改革課主幹）

山口 はじめまして。東近江市の企画部にあります緑の分権改革課というところで働いております山口と申します。よろしくお願いいたします。

緑の分権改革

緑の分権改革という言葉、ほとんどの方はご存じないのではないかなと思います。ピーターさんの話を借りると、話の必然によってできた課というふうにも言えるなと思いながら聞いたんですけれども。そもそもは総務省が地域資源を最大限活用して、地域の活性化、絆の再生を図って、分散自立、地産地消、低炭素型、とにかく持久力と富を生み出す力を高める地域を作りなさいというふうに総務省が言いだしたことから、その言葉ができています。

この東近江市では、それをヒト・モノ・カネが地域で回る仕組みを作りましょうというふうに訳して皆さんに説明をしています。わかりやすい絵にすると、こういうことなんです（図1）。中央集権型から地方分散型へということで、前半、今、小梶さんのお話があったような、いろんな様々な活動が、既に東近江にはありました。それをより地域の自立とか、富を生み出す力を高めるものにつないでいくためにできたのが、私どもの活動というふうに認識しております。



(図1)

東近江市の現状

皆さん、琵琶湖がどこにあるかはお存じですか？東近江市は三重の県境から琵琶湖までつながった1市6町が合併してできた大きな町であります。市長がよく、日本の1000分の1モデルと、先程も小梶さんのほうからありましたけれども。そうですね。海と大都市以外は、全てあります。それはいいことも悪いことも含めて。ですので、この普通のよくある町ですね、成功モデルが作れたら、それは全国に役立つモデルになるのではないかなというような期待も込めて、この町に関わっています。

様々な地域の財産、先程から出ております三方よしというのは、もちろんCSRの原点になっていることですし、遺跡の数、文化財の数を考えても、かなり古くから人が暮らしていた地域であるという

ことが、よくわかります。

また、森林が面積の半分以上を占めております。また、滋賀県人って、どこに住んでるんやろうって、よく県外の方が言われるんですけども。山と琵琶湖しかないのに、皆さん、どこに住んではるんですかと言われるんですが。実は東近江は、唯一湖東平野が広がっておりまして、大変豊かな農地を抱えているのも特徴であります。

そんな町の最も特徴的なのが、先程もチラッと紹介がありました、この市民自治だというふうには思っています。A3の図（折り込み図、67ページ）には、地域でがんばる様々な活動が取り上げて紹介をされています。ここに個人名が入っているというのが、この図の特徴の一つ。またその分野がボランティアなものから、なりわいになっているもの、また環境、福祉、医療、農業、林業、商工関係、様々なものがここにあがっているというのが、その特徴になります。

ピーターさんの話にもあった一番最後の事例で、私達が本当に理想とする、目指すものだなあというふうにしたのが、地域の課題を解決するということに関して、健全者も障害者も高齢も若者も子どもも関係ないということです。行政も商業者も関係ないというふうには今は、考えておりまして。

とにかくお金も人もない中では、総力戦なんです。とにかく皆が力を合わせて、この危機を乗り越えないといけないという発想をもっている人達というのは、勝手につながっていくんですね。我々は、そのきっかけを様々な形でお手伝いしているということに過ぎないと思っています。

多分野連携

先程から言っているように、多分野連携の仕組みが既に東近江にはあちこちで生まれておりました。その一つが、ご存じの方も多いかもしれませんが、「菜の花プロジェクト」であります。環境、農業の関係者、そこに行政も関わって、食とエネルギーの自立というのを、かなり早くから提案して進められてきたものでありますし、先程も出てきましたが、太陽光パネルを市民がたくさん集まって出資することで、屋根を持たない人も発電事業に参加できる。なおかつ、それを円ではなくて、地域商品券で返していくことで、地域の経済が潤うというようなことを実現している市民共同発電所という取り組みも始まっておりました。

また、ハンドシェイク協議会というところでは、環境系 NPO、まちづくりに取り組む団体、財団、行政が参加しまして、地域のおばちゃん達が、自慢の料理を持ち寄って、レシピを作るというようなことをやってこられました。それが実はつながって、福祉モールの中に農家レストランがオープンするというにつながっています。

また、森林、林業の関係者が、NPO やデザイン事務所と連携をすることで、地元の財を生かした商品開発をしながら、またサービス提供をしながら活動をしている kikito という団体もございます。ここも緑の分権改革課ができる前から活動をしていたところでもありますし、緑の分権改革課ができてから、実は次に話してくださる野々村さんともつながって、今、障害者の方と協力しながら商品を提供するということにもつながっています。

先日、東近江で開催された介護保険の全国サミットに参加してくださった方が、確かこの中におられると思うんですけども、その時に記念品で入っていた商品を提供しているのが、この団体です。あのパッケージングをしてくれたのは、いろんな障害があったり、事情を抱える方々で、協力をしていただきました。

薪プロジェクト

そして緑の分権改革課が東近江にできてから生まれたプロジェクトの典型例が、この「薪プロジェクト」(図2)になります。私は実は元々林業の普及員をしておりました。人工林、杉とかヒノキとか、人が植えた林というのは経済林ですから、もちろん採算に合わないといけません。それも厳しいという現状が実はあるんですけども。そうではない雑木林というのは、はなから採算に乗るわけがないというのが林業界の常識です。

ですが実は関西のほうでは、その雑木が徐々に枯れていくという問題が起こり始めて、将来的にエネルギーとして活用できる、もしくは水源の森として大変重要な位置づけであったところが、活力を失ってきているという課題に直面しております。

そこでなんとかできないかといろんな方にご相談をして、実は野々村さんと出会うことができました。そこで総務省からいただいた調査事業を活用して、雑木林を伐採しながら更新を進めていく。その伐採した材を薪として活用していただくことで、地域に還元をしていく。多少のお金をいただきながら、それをビジネスとして回していけないかというような調査をやらせていただきました。

その結果、ボランティアの方ですとか、障害者の方ですとか、様々な方に協力をしていただいたら、採算合うでという結論が出たんですね。そこから実は現在も継続して事業が続いておりまして、障害者の方にも薪割りを手伝っていただきながら、雑木林を更新させていくというようなことが、少しずつですけれども、続いているということがあります。

プロから見たこの事業の感想はまた野々村さんにお任せするとして、林業に関わってきた私からすると、これはすごい画期的なことでありました。

平成24年度の取り組み

私どもの課では、とにかくこのヒト・モノ・カネが地域で回る仕組みを作るための支援が何かできないか。もしくは地域課題を解決したいとって活動する方の支援が何かできないか。がんばっているこの人と、困っているこの人をつなぐことで、地域をもっとよくできないか。そんなことを常に考えながら仕事しております。

今年度、典型的な取り組みとして、まちづくりネット東近江というのがスタートしました。これは行政と市民の間をつないでくれる中間支援の組織であります。実は10年以上前から、各地で中間支援組織というのが作られていました。ですがどちらかというと、それはボランティア支援であつたりとか、そういう色が強かったんですね。でもピーターさんのお話にもありましたけれども、障害のある方にバスケットを教えるのではなくて、農業技術を教えなきゃいけないんじゃないかというような発想が、実はここにもありまして、私達は地域のソーシャルビジネスやコミュニティビジネスを支援す

●その4

多分野連携取り組み事例⑤

- 薪プロジェクト (モリスマイル検討会)
100㎡を皆伐すると薪原木1t(薪700kg)の資源量
伐採・搬出・運搬・薪生産・薪配達の経済性は
専門家が行うと赤字、市民協働型は黒字
- 市民サイドの動き
 - ・ 里山保全活動
 - ・ 獣害対策
 - ・ 障がい者雇用
 - ・ 広葉樹・針葉樹併用型の薪ストーブの開発



(図2)

る仕組みを作っていかなければならないんじゃないか、と考えています。そのためにはお金と情報がとても重要であるということを、団体の皆さんから教えていただいて、その仕組みづくりをしております。

一つは団体の資金調達を、寄付という形で集めるお手伝いできないかということで、事業指定寄付というのを今年度やろうとしております。また市民参加の情報発信ということで、パブリックアクセスという言葉があるんですけども、公共の情報発信のツールを市民が使う権利を持つというような考え方があります。実は東近江には、地域のコミュニティFM、ケーブルテレビが整備されるんですね。それを活用して自ら企画し、情報を発信するという、そんな仕組みが作れたら、もっといろんな活動が繋がって、個人が繋がっていくのではないかと考えています。

また先程あった、あのA3の図（折り込み図）で飲み会をやっているだけだとおっしゃいましたけれども、実はそんなお手伝いも、このまちづくりネット東近江がしています。行政がやると、どうしてもフォーマルな会になってしまうんですね。でも東近江で大変重視しているのが、インフォーマルとフォーマルの間を無理なくつなぐということで、いつも意識しております。ですから、実はその飲み会というのは微妙なんですね。それは山口さんは仕事でやっているのか、そうじゃないのかと言われると、うーん、両方なんですね。仕事の課題設定しているミッションの実現にも、もちろんつながりますし、仕事を離れてインフォーマルなつながりとして、ちょっと悪いけど、これお願いできますかというようなことを言える関係ができるというのも、実はとても重要です。行政は行政だけで町が作れると、これまで勘違いしてきましたけれども、そうではないということを東近江で私は本当に実体験として教えていただいています。

もう一つ、ウェブ上でもつながる場を作ろうということで、地域情報ポータルサイト東近江というのがオープンしました。実はここには商業の情報も入れようということで、もう一つ姉妹のサイトが実はできております。そちらのほうも、大変人気ですね。こんな田舎でこんなものを作っても、誰も見てないんじゃないかという意見もだいぶあったんですけども、なぜか毎日数百件の方に見ていただいて、かなり好評なものになりつつあります。

地域自立の取り組み

私どもの課としてはフォーマルには、自給圏の確立を目指すということで、内橋克人さんという方が提唱されています「食とエネルギーとケアの自立」を目指して、様々な仕掛けをしております。私どもの課には分野というものがございません。限られたスタッフでできることというのは、本当にわずかなんですね。なので、地域の皆さんと一緒に、いろんな立場の方、いろんな分野の方と一緒に、こんなことを考えてみたらどうだろう、こんなことをやってみたらどうだろうというのを、うーん、でもそれできるかな、難しいなといいながら悩みつつ、関係課を巻き込んでいくということをやっています。

とにかく、あるものを生かすということ。分野をこえて連携させるということ意識して、なおかつそこにビジネスを作っていくということ。大儲けはできなくていいんです。大儲けは誰も求めていません、田舎の人達は。ですが、自分達が活動をしていく、もしくは次の活動につながっていく。そんな収益が得られる仕組みをどうして得るかということと、内発的発展よりは少し強い自治の仕組みということで、実は元々あった東近江の強みを、地域で今後生まれてくるであろう課題の解決にどうつなげるかというのが、私どもの仕事だというふうに考えています。

私からの話は以上です。ありがとうございました。

河野 山口さん、どうもありがとうございました。小梶さんが、すごく発想力と継続的力のある市民のロールモデルみたいな人で、そういった人達が集団になってやっていた東近江の様々な活動を、山口さんのような行政の人達がうまくコーディネートして、うまく全体で回していけるようにしていくというのが、よくわかったかなと思います。

そういう東近江市の市民の人達と行政の人達が一体となった活動の中で、では、障害の分野ではどのようなことが行われているか。何が起きているかというお話を野々村さん、お願いいたします。

◆ 10年後の彼を見つめた就労支援—野々村 光子

(働き・暮らし応援センター “Tekito-” センター長)

野々村 皆さん、こんにちは。東近江の働き・暮らし応援センターTekito-の野々村と申します。よろしくお願ひします。座ってお話をさせていただきます。

隣にいるお二人は、昨日の夜から前乗りをして東京を満喫して、ゆとりたっぷり、今座ってはるんですけど。私は昨夜は46歳の精神障害の方が、今、お父さんと二人でゴミ屋敷に住んでおられて、そのゴミ屋敷の中で調子が悪いだの、入院したいだの延々そんな話を聞かされた上、先程東京駅に着き、なんか時差ぼけ的な感じというか、東京駅と昨日の夜の家の状態のギャップに、なんかちょっとボーッとしている状態でお話をさせていただきます。よろしくお願ひします。

障害のある方の就職、生活の応援

お二人からは、東近江の地域での取り組みというお話がありました。先程紹介いただいた、その中で障害のある方の生活はとあったんですけども、東近江の取り組みとは別ということではなく、あくまで東近江の地域の中に、これからお話しする障害のある方が働く、暮らすということがあるといふ視点で考えています。

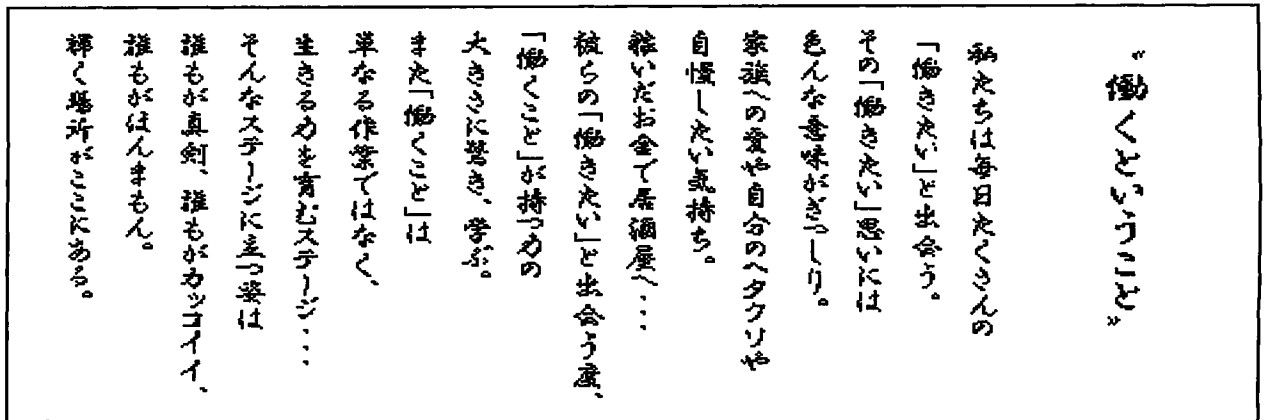
今日、お二人の話を聞いて、改めて私のとてもありがたいメリットだなと思ったことがあります。私は資料のほうにもありますが、障害のある方の就職、生活の応援をするという立場で、分野で言うと福祉です。でも東近江の行政に行く時に、まず福祉課に足を運ぶよりも、違う課に足を運ぶほうが数倍多いということです。また地域の中では、地域の何か福祉のセンターに行くというよりは、どちらかというと商工会の会長の家に行ったりとか、企業さんの労働組合に行ったりとか、企業さんの飲み会に行ったりとか、何か福祉と言われない所に行かせてもらうことが、たぶん仕事の8割か9割を占めているのではないかなと。たぶん今日も、そういう関係で私は呼んでいただいたような感じが…。なぜ呼ばれているのか、もうひとつわかっていないところがあります。それは当たり前にも今まで来たんですが、改めて今のお二人の話を聞いて、ありがたいことだなと思いました。ちょっとここで株を上げておきたいと思います。

10年後

資料のほうには、「10年後の彼を見つめた就労支援」と書きました。これは私がすごく大事にして

いるテーマです。先程、コールリッジ先生のお話の中で、持続性とありました。うちも「働くということ」(図1)を看板に掲げていますので、障害のある方やご家族の方がうちに働きたいんですということ相談に来られることがほとんどです。

その時に、来週働いていることを目標にするのではなくて、10年後、この地域でぼちぼち自分ががんばってるなあ、自分らしい暮らしができてるなあ、というような人生を送ることを応援させていただきねと、よく言います。なので、明日ではなく10年後のあなたと一緒に働くことについて考えたいと言っています。



「働くということ」(図1)と書いているんですけども、まあいろんな人が、うちの(図1)ドアをノックしはります。本当に「働く」という一文字、「暮らす」という「応援」というところで、いろんな方が来られるんですが。いろんな方の働きを応援してきて、本当に本人さんへの工夫とか、解決すべき課題、家族背景とか、いろんな課題、障害の重い方とか、支援のボリュームが大きい人ほど、働くというアイテムはとても有効だと、本当に毎日感じています。

働き・暮らし応援センター

うちのセンターの紹介なんですけれども、滋賀県では働き・暮らし応援センターと言います。ここ東京や、滋賀県以外、全国では、就業生活支援センターになります。滋賀県がなぜ働き・暮らし応援センターかといいますと、就業生活支援センターという国の事業より先に、滋賀県単独事業として、支援内容、業務内容は一緒なんですけど、働き・暮らし応援センターという事業が始まりました。なので、滋賀県だけは、国の就業生活支援センターと、滋賀県単独の働き・暮らし応援センターという事業、二本立ての展開になっています。

ここで就業生活支援センターって、ご存じの方、いらっしゃいますか？ ああ、知名度が低い。どうということかといいますと、また豊田さんとか、あのへんにまた聞いてもらったらいと思うんですけど。私もわかってないんですが。

障害のある方の就労というと、ハローワークの専門相談が窓口であるかと思うんですが。なかなかそのハローワークの専門相談だけで紹介をされて就職をして、継続的にがんばっていくということが、スムーズに行く方ばかりではないということがわかってきました。それは仕事のマッチングもそうですし、あと生活ですね。生活がうまくいかない、当然仕事がうまくいかない、就業を柱にした生活の応援もトータル的にやっていきたいと思いますという事業が、この就業生活支援センター、働き・暮らし応援センターとされています。

うちはまだ、平成18年からスタートしたばかりのセンターです。うちの地域のことは、先程山口さんのほうからも提示がありました。利用状況について、少し書いています(図2)。6月末の段階で659名の利用が、うちのセンターにあります。かなり田舎な地域での、この利用者の量というのは、たぶんかなり多いと国からも言われています。

先程、お二人からは、いい地域だ、いい地域だという話がありましたが、この数を見ると、どういふことかといいますと、生活困ってんねんという相談はしにくい、かっこ悪い。けども、働きたいねんという相談はしやすい、かっこいい。これや、とすごく思ってます。だからいろんな仕組みがある中でも、まだまだ障害のある方が、こんなことしたいねん、あんな働きたいねん、こんな生活困ってんねんというニーズをどんどん出せる地域には、まだまだなっていないのかなというのが現状です。

働きたいの現実に向けて

そんな地域の中で、うちのセンターがしていることは、6つ書きました(図3)。まあ相談はそうなんですけれども、あと企業さんの関わりです。普通、厚生労働省のほうからは、就職件数を上げなさいと、就職させなさいというのが目的なんです。求人開拓からハローワークの紹介後のアフターケア、生活相談、全てトータル的にうちのセンターでやるんですけれども、就職するまでの応援を、絶対必要やというふうに思ってきました。だから企業さんには、「見学だけさせてえな企業」というのを作りました。雇用ではなく、企業の門が開いていれば、「見学いつでもOK社長さん」を集めました。働いたことのない障害のある方とか、25年引きこもっている人とか、いろんな方が、企業の仕事を、まず見る。家と何が違うというところからスタートする。学校と何が違うっていうことからスタートする。けっこう見学をしていると、何回か行くと企業さん言わはるんですね。「今日の人も障害者か？」って言わはるんです。「なんでですか？」と言ったら、「あの人、スーツ着とんのに、お前、いつものジーパンやないか」っていうね。「見た目も全然違うし、挨拶も、野々村が『おお、社長、ごめん、ありがとう』って、さっきの人、めっちゃ深々頭下げてたぞ」っていうね。「社長、目が高い」というと、「なんや?」、「じゃあ社長、実習事業所に格上げです」っていう、企業さんも本当に障害のある方が働いている地域じゃ

【働き・暮らし応援センター“Tekito-”利用状況】

利用者/659人(H24.6月末現在)

障害別		年齢階層別		生活形態	
身体	56人	15~19才	149人	グループホーム	20人
知的	321人	20~39才	308人	社員寮など	2人
精神	173人	40~59才	186人	自宅	621人
その他	109人	60才以上	16人	その他	16人

(図2)

【働きたいの実現に向けて】

- ① 相談/働くことを窓口生きていく事について共に考える。
- ② 企業の関わり方提案(企業にしかできない応援)/見る・知る・選択する。
ワークシェア・見学・体験・実習・・・
- ③ ステップアッププラン/存在するものをアイテムに変えて活用する。
DC・作業所・通リハ・トライワーク・・・
- ④ 障害について/障害を第一にしない応援。
- ⑤ 暮らしについて/働く事は24hの中にある。
ひきこもり相談・多重債務相談・・・
- ⑥ ネットワーク支援/人生のプロセスが宝箱となるほんまもんの履歴書。

(図3)

なかったんです、7年前は。企業さんも、障害のある方が企業で働くっていうことが、どういうことかわからなかったんですね。だから見学からスタート。企業さんも体験事業所に格上げしてもらえるといて、ようわからん位置関係で。企業さんが実習 OK、じゃあ雇用していこうという、企業さん側のステップも一緒に作ってきました。

その中で、やはり企業さんのこういう応援を受けながらなんですけれども、障害のある方は、意欲がないとか、そういうことではなくて、すごく今も毎日実感するんですけれども、選択する力の乏しさとか、経験もないと思うんです。自分がどういう働きをしたいんかっていうことを、本当に就職前の力の構築に絶対入れなあかな、というのも思っているものの一つです。

薪プロジェクト

そんな中で先程の町の話に出てくるんですけれども、うちは障害というカテゴリーがあるんですが、最近本当に知的障害の方が当然多いんですが、発達障害の方、精神障害がある方、高次脳機能障害の方、それと最も多いのが引きこもりの方です。平均引きこもり年数、うちの地域では25年です。25年間、家から出てこられない方が、うちに家族が来られて、うちの子、そろそろ働かせたいねん、もう60手前なんやけど、というような相談が入るといのが常です。

そう思うと、今ある福祉の雇用サービスにのらない方が、とてもたくさんいらっしゃるということが現状です。そんな中で、先程の薪プロジェクトの話が出てくると思うんですが。山口さんとの出会いであったんですけれども、彼女から話をもらった時に、乗る絶対のきっかけになったのが、こういう仕事を作るから、障害者の方がしないかっていう話ではなかった、っていうところです。薪のプロジェクトがあると。そういう環境の仕組み、システムがある。ただ、ここの薪割り作業という、なんともやっかいな仕事を請け負ってくれると、知らんかいなというような話からスタートしたんです。

だから、障害のある方のために何か、ということではなくて、地域の仕組みの中に、ここ困っとんねんという話があった時に、実は15年家におるんやけど、体、めっちゃ丈夫やでっていう人がいるねんというところからつながって、その方が薪を割るという作業に展開したというのが始まりです。

だから直接ではない地域の仕組みの中に入るという、それがすごくうちの取り組みの中では、スムーズやったというところです。

薪作業で言いますと、工場で働いて失敗して、出られなくなったという障害の方なんかにとっても、とても有効やったのが、もう一度働くっていうアイテムをスタートさせるのに、失敗がないんです。薪割りは、絶対に。今日は薪屋さんの社長がいないので、好きなこと言えるんですけど、大きかって、小さかってもいいんです。燃えてしまうんで。別にそんな基準がないので、大丈夫なんです。こうすると本人さん達は、何をしても、絶対そこに、仕事というものに失敗がない、作業に失敗がないというのが、とても彼らにとっては大きな力になったなあと。

それを配達してお客様のところまで届けるという、どういう仕組みの中で自分は仕事をしているのかということもよくわかっているというのが、とても大事やなと思いました。

その薪作業をきっかけに、現在はそういう引きこもりの方とか、たとえば最近養護学校も行かなくなった不登校の子もうちにくるんですけれど、そういう子達がもう一回働くということの準備に、もう一回学校に、もう一度集団でがんばろうやということのための、働くというアイテムで、いろんな努力をすると思うんですけれど。その時に、たとえば今は東近江市の図書館全般のグリーン管理を受けています。緑化管理ですね。木を切ったりとか、草を抜いたりとか田舎の図書館はかなりすごい

ですよ。絶対草刈りのことを考えずに設計しはったなというぐらい、広いんですね。公園みたいになってるんです。それをうちのセンターで請け負ってるんです。

何がいいかという、地域にその場所があるということ。今まで、地域にそんなに出なかった方も、図書館はだいたい行ったことが1回ぐらいあったりとかするんです。そうすると、あの皆が使っている図書館をきれいにしたのは、俺やでっていうような、何かそういう地域の中で生まれるつながりというのは、とても多くあると感じています。

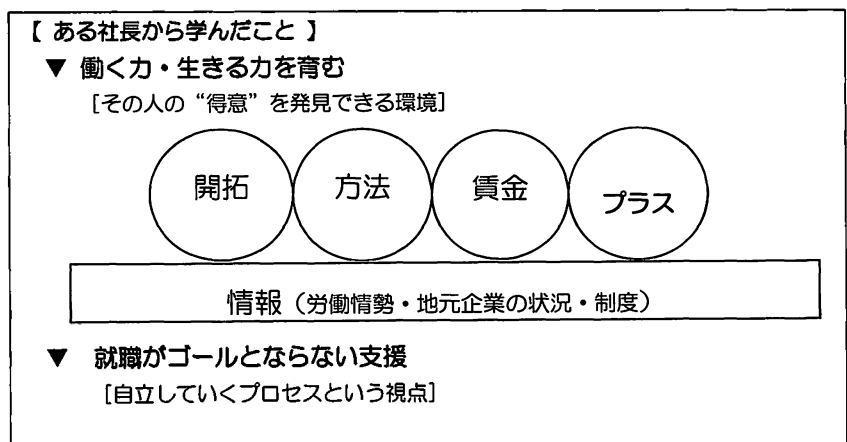
ネットワーク支援

最後に「ネットワーク支援」と書いています（前々頁図3）。「人生のプロセスが宝箱になるほんまもの履歴書」と書いています。これはどういうことかといいますと、就職するまでの、そういういろんな取り組みを、履歴書に書こうと言っています。先程の薪プロジェクトの話も、必ず履歴書に書いてもらっています。やはりその中で、薪を割ったことが大事なのではなくて、薪を割ることによって得たものというのは莫大なので、それが宝物やと話をしています。

そういう中では、何かそういう仕事を作ってもらおうというよりは、自分の住んでいる地域の中で、地域の取り組みのことを仕事としているという実感というのが、とても大事かなと思っています。

ある社長から学んだこと

「ある社長から学んだこと」と書いたんですけども(図4)、私は毎日、企業さんに、いろんな会社の社長さんに出会います。そのある社長さんに、うちに来ている人は、えらいいきぬくいってわかって言っただけです。いきぬくいってわかります？ 生きづらい。生きづらいわあって言っただけです。ほんなら、その社長か



(図4)

ら、その人が生きやすく力をつけるだけではなくて、生きにくいと感じない地域にしてしまうほうが早いんじゃないかという話をいただきました。

ああ、そうかと思って、今、うちを応援してくださるそういう企業さんの会社社長会を作ったりとか、部長会を作ったりとか、課長会を作ったりとか、うちがお付き合いさせていただいているいろんな企業さんに集まってもらって、雇用というものではなくて、この地域をどう作っていくかということをサポートしたりもしています。それは全て、先程の山口さんなんかの考え方を学ばせてもらって、それを行政さんともするし、企業ともやるというような形を今、少しずつ展開しています。

あと大事にしていることとしては、就職ということがゴールにならない支援ということです。就職したことによって、自分の人生が太ってきたなあ、いいなあと思えるような支援がしたいと思っています。

大切にしている事

【大切にしている事】

- ▼ いつからでも始められる就職活動
- ▼ 「働きたい」の奥にあるモノを見つめた就労支援
- ▼ 障害者が地域の企業に出入りする事が当たり前地域へ

(図5)

かったり、なかなか地域の中で見えにくいしんどさをもっておられる方もたくさんいらっしゃいます。その方達に、精神科に入院している時から就職活動はできると。引きこもっている時から就職活動はできると。いつからでも準備ができるんやでという話をしています。引きこもっていた間がムダにならないような応援をさせてくださいという話をしています。

次に「働きたい」の奥にあるモノを見つめた就労支援」と書いています。うちは、働きたいと言ってドアを叩かれる方が、だいたい 100%ですので。働きたいから就職、ということではなくて、この本人さんが働きたいと言うてはる裏には何があるのかなと思いつつ、一緒に応援させてほしいという話をしています。

あとは「障害のある方が地域の企業に出入りすることが当たり前地域へ」と書きました。障害のある方が、役場の福祉課しか出入りすることが普通じゃなくて、コンビニとか企業に障害者の方が出入りすることが特別に見えるような地域ではダメだと思っています。ということは本人さんの働きが、ボランティアではなくて、当然本人にも企業にとっても必ずプラスでなければいけない。その人が納税者になっていくということは、地域全体が先程の話であったように、いろんなものが混ざっていくというようなことになっていくと思っています。

そういう意味では、作業所といわれる通所授産施設なんかを自分の働きの方やとがんばっておられる、障害が重いと言われる方達の働きもうちでは応援します。その人達が作ったコップなど、いろんなものは、絶対にそこに眠らせない。そこを企業の市場に載せていく作業というのもうちがやります。そこを作業所の方と一緒にやっていきます。

うちはただ単に、仕事上、企業さんとの付き合いが多いので、それを作業所の方が利用していただくというようなネットワークで、障害のある方が生み出すものをきちんとお金にかえて、その方の暮らしが豊かになるように還元していく、ということをしています。

15分と言われて、ちょっとオーバーしました。申し訳ない。以上です。ありがとうございました。

河野 ありがとうございました。時間のほうは想定内です。お三方のお話をうかがって、すごくおもしろかったんじゃないかなと思います。魅力的なお話だと改めて思いました。

◆ 質疑応答とバズセッション

河野 先ほどのピーターさんのお話の時と同じように、前後のテーブルの方々に、少し今のお話を共有していただきたいと思います。何かわからなかった点とか、自分の思っていることをちょっと話し合ってもらって、その後、幾つかご質問をお受けして、ということをやろうと思います。3分ぐら

いということで、すごく短いですが、ちょっと前後の方で話し合ってみてください。

(バズセッション)

コールリッジ 皆様のプレゼンテーション、とても興味深く聞かせていただきました。障害者と地域開発を結びつけるということは、とても大事だと思いますので、障害の問題だけでなく、たとえば環境とか行政とか、他のものと結びつけて、全体で発展していくということ、そして動員していくということ、これがとても大事だと思いますし、それを実行されているというのは、本当に素晴らしいと思います。

まずそれぞれ1点ずつ申し上げたいと思います。小堀さんのお話の中に、近江商人のお話が出てきて、近江商人は、無駄遣いしないとか、「律していた」という言葉は本当にとても重要で、私も好きな言葉で、世界的に求められているものではないかと思います。

つまり「律している」ということがどうして重要と思うかということ、自分が何をやっているかを考えているからということになります。単なる金儲けのためにやっているのではなく、さらに大きな、その奥の社会のことまで考えている、ということになるからです。

山口さんは、緑の分権化についてお話してくださいました。この分権というのは、本当にそうだと思います。それも環境、経済、障害、全ての分野におきまして、地域で自分達の解決策を見つけるということはとても大事だと思います。ただ一つわからなかったのは、フォーマルとインフォーマルという言葉をお使いになりましたけれども、どういったものがインフォーマルになるのかというのが、ちょっとわからなかったもので、それについてお聞かせください。

また野々村さんのお話にもありましたけれども、たとえば雇用主が何を求めているかということを知って、次に障害者に何ができるかということを考えるということ、それはとても大事だと思います。そうすることによって、ちゃんと強いものを提供しあえるということがあるのではないかと思います。

利用者数が659人とおっしゃいましたけれども、なぜ彼ら仕事をしたいと思ったかについての調査はされたのでしょうか。それについてお聞かせください。私からは以上です。

河野 ではピーターさんから質問が2つ、山口さんと野々村さんにあります。

山口 先程の説明の時にも、実はフォーマルとインフォーマルというのが、間がとても難しいと言ったような気がします。一つは地域のキーマンの飲み会、「魅知普請の創寄り」というのをやっており、インフォーマルな関係を作っていただくということが、一つの目的にもなっています。何か困った時に、携帯電話1本で相談できる関係をつないでいくと。顔の見える関係をつないでいくということになります。ですが、それをフォーマルでやろうとすると、どうしてこの人達を選んだのかというような話になりがちですね。行政は公平、公正を求められますので、その人選に、地域でがんばっておられる方々を集めたつもりですというような言い方をしても、なかなか難しい。

ですが、実はそのインフォーマルなつながりが、フォーマルな会、たとえば審議会を作るというような時にも、大変効力を発揮していきます。どういう方をお願いをしたら、行政が理想とするような、たとえばまちづくりにつながっていくのか、市民の方が本当に望むまちづくりというのが何なのかを理解した方が、公式な発言の場に出てきていただけるというような、私たちが仕事をする上でインフ

フォーマルなつながりが、実はフォーマルな仕事に役立っていきます。
それを実はうちの課は微妙につないでいるというような状況です。

小梶 この図（折り込み図）なんですけれど、インフォーマルというのは、団体と団体がつながったりとか、企業が企業とつながるという時に、本来フォーマルだけでつながるというのが異業種交流かなど。異業種交流でないつながりということは、先程のピーターさんのお話の中で職業訓練校がありましたよね。その中では技術的な習得がフォーマルだと思うんですね。たぶん生活技術を身につけるというのがインフォーマルだと思う。そのことによって非常に幅ができて、なんというか、いろんな方々がつながりやすくなるというか。そのへんを我々は意識しながら活動しているんです。

河野 ありがとうございます。野々村さん、お願いします。

野々村 659 名の方の働きたい状況ということなんですけれども。うちのセンターに来られる経路としましては、だいたい半分が地域の自治会の方とか、多いのは職業安定所、あと行政、病院、学校、そして企業から話があります。今、働いているけれども、うまくいかないという相談も含めての相談になります。あとの半分がだいたい 2.5 が本人さん自身から、2.5 が家族からといわれるような相談状況になっています。

ただ、そこからですね、うちに相談があつてからのニーズ、本当のニーズというところですね。先程言いました、「働きたい」の裏に何があるねんという。その中では働きたいって本人さんが来られても、よくよく話をすると、父親が 30 歳までに働かないと家を出なさいと言っているとか、そういう本人さん自身の本当のニーズではないニーズが背景にあるということがほとんどです。

本人さんが働ける状況の工夫もわからないので、働ける基準というのが、何かということは明確には言えないですけども、今、自分が働きたいという思いと、働ける状況にある方、明日、じゃあ朝 8 時半から行けるかっていう方っていうのは、基本的に相談がある中の 1 割ぐらいです。

河野 野々村さん、ありがとうございます。ピーターさん、今の説明でよろしいですか。またこの後、いろいろ聞いていただければと思います。以上で一応、東近江の方々の報告は終わりにさせていただきます。皆さん、もう一度拍手を。

司会 東近江の皆さん、誠にありがとうございました。これで午前中のセッションを終わりにいたします。お昼に入る前に、午後のセッションの持ち方について、簡単に午後のファシリテーターの林さんからご説明していただきます。もう少しお待ちください。

林 とても密度の濃い、また情報量の多い午前の部でしたので、午後はそれを小グループの中で、他の方と共有しながらこなすところから始めたいと思います。先程来近くの方とバズセッションを持ってくださっていますので、それを生かしながら、6つのグループを作りたいと思います。

グループリーダーの方、立ってくださいますか。A今西さん、B宮前さん、C宮本さん、D田畑さんと金沢さん、E山本さん、最後F河野さん。では午後の部は、1時50分からです。よろしく願いたします。

◆ 午前中の講演者の皆さんとの対話集会

進行：林 かぐみ

(アジア保健研修所事務局長)

尻無浜 博幸

(松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科准教授)

尻無浜 これからの時間少し進めていきます。私、尻無浜と申します。所属は松本大学です。どうぞよろしくお願いいたします。

林 アジア保健研修所という NGO で職員をしている林と申します。

では、それぞれのグループでお話いただきたいのは次のことです。時間は1時間ほど見ています。

一つ目は、午前の2組の方たちの話を「消化」しましょう、ということです。初めて気がついたこと、あらためて重要だと思ったことを出し合ってください。やっぱりこれが難しさや課題だと思われたこともあったかもしれません。

二つ目は、今日のテーマであります「CBR と三方よし」、あるいは途上国での障害者のプログラムやプロジェクト、CBR のプロジェクトと日本の地域でのいろいろな福祉の取り組み、あるいは地域づくり、この2つの交流から得られるものを考えてみてください。共通の課題を意識的に出していただければと思います。さらにもうひとつ。それぞれにとって前に進めていくためには何が必要かも触れていただければと思います。

講師の方たちにはこの1時間もいろいろ回って、皆さんのお話の様子を聞いていただこうと思いますので、途中また加わっていただくことも可能かと思えます。はい、それではよろしくお願いいたします。

各グループの話し合いの内容を発表していただきたいので、どなたかメモをとってくださるようお願いいたします。

(グループ討議中)

尻無浜 それでは、いつも時間のことばかり言って恐縮ですが、これから50分間、3時50分までの時間の中で、各グループで話し合っていたいただいたものを発表していただいて、最後まとめて持っていくという形で進めたいと思います。

それぞれのグループで重複しているようであれば、後のグループのほうがちよっと割愛しながらそれぞれグループの成果を発表していただきたいと思えます。

それではAグループからお願いします。

A・Bグループの発表

人数の関係でA、B合体のグループです。我々の話はいろいろなところに広範囲に及びまして、参加者も海外経験のある方も多し、日本の状況を仕事などで知っているなど、バラエティに富んだメ

ンバーでしたので話も非常にいろいろなところに飛びました。

キーワードを挙げさせていただきますと、午前中の話は、共通のこととして、個々の利益ではなく社会の利益を大切にするという考え方であるということが挙げられていました。それと共通しますけれども、利するという話がありましたけれども、共通することだと挙げられていました。それから、CBRはつなぐことである、ということが挙げられました。それに関連して我々のグループとしては質問が上がっていたんですけども、そのつなげる基盤があるからできるのではないかと考えているんですけど、その基盤をどのような仕組みで作っていくのか、という質問がありました。

それからもう2点、ピーターさんのお話でウブントウの話が出ていたと思いますけど、もう少しこれについて突っ込んでお聞きしたい。伝統的な価値と東近江の事例とを考えた時に、このウブントウの話と東近江の例に共通点を見出すには、ちょっと若干我々としてはいろいろ考えてみるとなかなか見出しにくいということもあったので、ウブントウのことをもう少し深く知りたいなというのがありました。

それから CBR のいい点というか、キーワードとしては、エンパワーされたということが挙げられるのではないかと。その中で障害者の人達が参加できるようになると。また大きな成果がインプットされて、そして生活できるようにして、かつ成り立っていくということが非常に共通していたのではないかと、ということが挙げられていました。

それから、マーケティング、マッチング、フォローアップが持続可能にする視点であると我々は考えました。またそのための人がいるという話も午前中の話で出てきていましたけれども、それが必要な点じゃないかということが出ていました。

懸念としては、一方で引っ張っていく人がいないとなかなかそれは難しいんじゃないか。逆に言うと先ほどと同じですね。人がいることと、引っ張っていく人がいないと、どうやって進めていくのかということが懸念であると挙げられていました。

我々のグループとしては、ちょっとまとまりがないですけど、いろんな意見の中で共通の意見とか質問としてはこのようなのがありました。以上です。

尻無浜 ありがとうございます。今の質問に1つ1つ答えていただくほうがいいかな。よろしいですかね。

つなげる基盤をどう作るか、方法論みたいところをアドバイスいただきたいということと、ウブントウと三方よしとの関連性をもう少し聴きたいというコメントだったと思いますが、いかがでしょうか。

林 つなげる基盤は東近江の方にも言っていただくといいですね。

尻無浜 では、東近江の方からお願いします。

つなげる基盤の仕組み

山口 一番わかりやすいのがA3の図（折り込み図）をどう作るかという話だと思うんですけど、最初からあの図ができたわけではもちろんありません。さっきもしゃべってたんですけども、3つ、4つ会社の人が出て、それを10個にした人がいて、それを50個にした人がいて、そういう何人かの

手を集めてくることで、町の中でこんな風に、こんな人いるんや、あ、この人知らなかったとかいうようなことが見える化されていったということで、せっかくならこの人達をいっぱい集めてみたら面白いのと違うかという発想が生まれて、じゃあ、最初はキーマンの20人ぐらいを飲み会で皆で集めてみよう。そこから自分達だけじゃもったいないからもっと声をかけて、ということでそれが100人集まる飲み会に発展するという、こういうインフォーマルな基盤。それをフォーマルな部分でもできる範囲で支えているというのが東近江の状況かなと思います。

小梶 今、山口さんの言われたように我々もキーワード（折り込み図-A3の表にある）を立てています。行政と喧嘩にならないのは、要求型でなく提案型にする。行政と喧嘩するんじゃなしに、一緒にやるんだけど、要求していくんじゃなしに、提案をしていこうと。それとプラス思考。求められることの面白さ。そういう人達を、何人かを本当に集めてみただけなんですよね。共同で何をやるかという発想で、じゃ宴会でもやろうという話で、この方々が、なんというかキーワードで自分達の知っているグループをとりあえず会わせたいんですね。それが大体20人ぐらいだったんです。じゃあそこで一旦宴会をやって、もっとこんな面白い人いるよと、結構つながりが出てきて、やっとこの形になった。

この中でもあやしいものがいっぱいあると思うんですけど、それも含めて発展していけると思っているんです。

尻無浜 ありがとうございます。私なんかは常々、長野県松本市に住んでいるものですから、田舎が見えるんですね。人口24万人ぐらいです。ここに書いてあるようなNPO法人であるとか等々はどこでもあるかと思いますが、私、個人的に思ったことは、ひとつは行政でこうやって（折り込み図）ひとつの基盤と言いましょか、一つの姿としてピチッとまとめてあることが東近江はすごいなと思うんです。このようにまとめられる誰かがいるということです。

で、今日最後にピーターさんが、知り合う、知り合いは心的関係のネットワークを構築する戦略であるとおっしゃいました。これが戦略なんですね。そういうメッセージからすると、これをまとめていったものを東近江はこの先、戦略としてやっていこうというようなビジョンをお持ちですか？

山口 それは市役所に聞いて下さい。

あのう、おそらく私が知らないところでいろんな戦略を皆さん勝手に立てておられると思います。行政という立場からすると、行政は行政でこれを戦略的に利用していこうとは思っています。もちろん成功への課題はいろいろ、私自身も見えていますので、それを解決するのに、こういうつながりが、この人ならこんなことできるんじゃないか、じゃあこの人にちょっとこういう調査と一緒にやってみませんかとか声をかけていくということが、私達は立場上できるので、そういうことを逆にこれをどうやって利用していこうかなというのを私は私で考えていますし、おそらく小梶さんは小梶さんで、野々村さんは野々村さんで、きっと戦略をそれぞれお持ちじゃないかな。それが知らないところで、見えないところでいつの間にかつながっているというのが東近江の最大の強みじゃないかなと思います。

尻無浜 はい、ありがとうございました。次へ進みます。今の2つ目の質問としてウブントゥですね。ピーターさん。

ウブントゥとは

ピーター 今朝ちょっとわかりにくかったら申し訳ありませんでした。私が一番最初にこれを始めたきっかけというのは、世界は危機的状況にあるという考えからでした。つまり環境的にも社会的にも経済的にも政治的にも本当に混乱している状態です。これは先進国、途上国双方に当てはまりません。ですから、私達は自分達の生活、暮らしをどのように良くするかということに関していい方法を見つけなければなりません。そして大規模な社会的変化というのはとても時間がかかります。けれども私達は何かポジティブなものの上になんかものを積み重ねていかなければなりません。私が今回ウブントゥを取り上げたのは、そうしたポジティブな例の一つだからです。

ウブントゥ以外にもいい例は数多くあります。例えばバングラデシュですが、女性が市場をコントロールしているという例があります。女性が野菜を育てて売り、そして男性ができない方法で経済をコントロールしています。

もう一つの良い点は、大きな企業へ頼んでやってもらったり、そのコントロールを受けながらやらなくてもいいという点です。コミュニティが自分達で自分達の方向を導いて行かなければなりません。ウブントゥと三方よしの共通性というのは、まさにそれです。コミュニティが自分達で自分達のやり方を見つけてやっているという点です。

ウブントゥというのは単に経済活動だけではありません。ただ単に近隣の店よりも高くバナナが売れる、そういう状況のことではありません。それよりももっと大きなことで、個人をもっと大きな枠組の中で捉えるということです。つまり大きな人間性の中の一部にこの個人が位置づけられている、そういう見方をするという点です。

三方よしもまた同じようなモラルの位置づけだと思います。例えば良い商品、誠実さ、そしてお客様を公正に扱うということ、それがすべての人に良しとなる考え方です。

これでウブントゥと三方よしの関係について、もっと明らかになりましたでしょうか。

尻無浜 はい、ありがとうございます。では、次に進みましょう。

Cグループの発表

では、Cグループで話していたことをまとめます。

まず1番目の午前に話されていたことで重要な、大切に思うことですね。その中で相互支援関係、片方だけが何かをするという関係ではなくて、両方にとってメリットになるこうした関係を常に意識していることが大事なんだと思いました。

そしてプラスの価値観ですね。よそ者だからというのは、こちらの話なんですけど、その土地土地にいい伝統的な価値観があるけれども、それはそこに住んでいる人はなかなか気づかない。よそ者だからこそわかるプラスの価値、そういう価値観をどうやって伸ばしていくのか、そうした視点はとても大事だと話しました。

次に、何か懸念すること、課題だと思うことなんですけど、この裏返しで相互支援関係にしても一方向の関係ではなくて、両方共にメリットになるようなものがないといけないんですけど、メリットってなんなんだ、どうやって発見するんだろうか、そしてそれをどう感じてもらうのか、ということがなかなか難しいと思いました。

もう一つ課題に思うことは、特に日本で、他の国の都市でもそうでしょうけど、地縁、地域の縁と

というのが嫌で都市に来ている人も多いと言われていますが、現代社会に合う共同社会というのをどう作っていくかというのが課題だと話しました。

2番目が CBR と三方よしですけど、今日午前に話されたことを受けて、どう活かしていこうかということをお話してみました。付加価値というのが大事だなと思いました。その付加価値というのは何かというと、ピーターさんのお話で職業訓練校では単に技術だけではなくて、技術プラスアルファの付加価値をつけて送り出した、だからこそ成功したと感じております。その付加価値の中で、特に大事なものは、自信をつけさせるということだと思いました。あとは成功例に触れさせる仕組みづくりをしたということが大事で、成功を再生産していく仕組みを作っていけたらと思います。

そういったことは我々がそれぞれの立場で取り組んでいける、非常に重要なメッセージと思っています。

儲ける手段にこだわるのも大事ではないか、という話も出ました。福祉の関係者だと結局マーケットニーズを見たりしない人が多いと思う中で、ピーターさんの話の3番目で、三方よしの職業訓練について単に障害者だから働ける場所を作ってあげるのではなくて、社会の中で必要とされることを探して、そこに労働を提供してお金を儲ける、そして働いてお金を儲けるということはそのまま自信にも繋がるし、家庭内での地位にもつながるし、とても重要だということが確認されました。私達はそうしたことを活用して今後の活動につなげていきたいと思っています。以上です。

尻無浜 ありがとうございました。では、次、Dグループ、お願いします。

Dグループの発表

皆さん、こんにちは。Dグループは6名の方で話し合いをしました。まず前半のことについて、皆さん様に、日本人としても、途上国の事例ですとか、東近江の事例にいろいろ学ぶことが多いという感想でした。その中で一つピーターさんにお伺いしたいことがあります。バナナを売っている方ですとか何人かの事例が出てくるんですが、皆さんとてもパワフルで、多分最初からその地点に到達していたのではないんじゃないかと想像できるんですね。それで私達は途上国に外部から係わるわけですけど、そういった彼女達のエンパワメントの部分が私たちが係わる場面の一つではないかと思うんです。実際お二人、オフアさんとデイビッドさんがどのような形でエンパワーされていたのかを伺ってみたいなあという話になりました。

次は、私達の中でよく話に出てきたのは、キーワードとして「もっとゆるく生きたい」ということです。それはなぜかということ、日本ってとかくカチコチに固められた作業形態が中心で、それ以外はなかなか適用できなかつたりするんですけど、本当はもっと多様なそしてもっと柔軟な、例えばインフォーマルな活動や情報交換ですとか、それこそ仕事の仕方ですとか、活動の仕方ですとか、生きていく方法ですとか、もっとあっていいんじゃないか。あんまり規則にがんじがらめにしないで、ゆるい感じでいかしてもらったら、もっといろんな人達のいろんな活躍の場が増えるんじゃないかなという話になりました。最終的にはもしかしたらいろんな国レベルのシステムまで変えなければいけないんじゃないかという、ちょっと大きな話にまでなりました。

それから、少し前もお話あったかもしれないんですけど、こういった地域のつながり作りというのは小さい単位でやるのが効率的で、逆に大きな単位でやるのはいろいろ難しいことがあるんじゃない

かという話になりました。特に先ほど都市部に出てきている人達の考え方とかお話があったんですけど、やはりあまり大きなところでやろうとすると日本人ですから、施設とかもできてしまうかもしれませんが、こういったネットワーク作りは大きくない単位がいいだろうと思いました。

それから最後にいろんなセクター間の連携ということで、例えば先程職業訓練の中で生きていく力も一緒に訓練生に身に着けてもらおうという話があったんですけど、これはおそらくいろんな場面の人づくりで言えることでしょうし、またそれが例えば日本でいう福祉の分野と連携をすとか、そういったさまざまな連携を築いていくことが、これからますます必要になっていくのではないかということになりました。

以上です。ありがとうございました。

尻無浜 ありがとうございました。

今、Dグループから出た中で一つピーターさんに質問がありました。オフアさんとデイビッドさんのことで、エンパワーされたもう少し詳しいストーリーを聴きたいということでしたので、お話いただけますでしょうか。

エンパワメント

ユールリッジ はい、とてもいいご質問をありがとうございます。

まずデイビッドのことからお話します。デイビッドは小さい時にポリオになり、その途端に父親は彼を拒否しました。農業もできないし、お前なんか大した人間にはならないと拒否しました。けれども母親のほうに彼を信じまして、彼を学校に行かせ、中等教育を終えさせ、高等教育にも進ませようとしました。

デイビッド自身がやはり母親が彼の人生にとって一番大きな影響を与えたと言っています。彼女がいなかったら全てはおこらなかつたらろうと言っています。

これを見てもおわかりのように、やはり家族が信じること、サポートすること、障害者が何かを達成することができると思える、それがとても重要であるということがわかっていただけたと思います。

オフアのことですけど、先ほど言いましたように、まず彼女を見て最初に驚くのは、とても楽しそうにしていることです。皆さんご経験があると思いますけど、ネガティブ思考な人と一緒にいると自分のエネルギーも吸い取られるような気分になるということがおわかりいただけると思います。けれども、ポジティブなエネルギーの人のそばに行くと、私達はそのポジティブなエネルギーを分け与えてもらえるのです。そこでオフアは、自分の性格のポジティブなエネルギーの部分から始めたのです。

インドの職業訓練校もまさにそういうことをしようとしました。つまり人々に彼らのポジティブなエネルギーを見て欲しいということから始めたわけです。私達は自分達の考え方によって現実というものを創りだしています。そして私達もそこから学ぶことができます。インドの職業訓練校ではまさにそうしたことを教えています。

それがお答えになっていますでしょうか。

尻無浜 ありがとうございました。自分達の考え方によって作り出している、ということでしょうか。ピーターさんの講演の最後のまとめで、市民と政府と共同作業とが大事であって、それを自分達

でやっていくことだと。東近江の取り組みを見ましても、自分達で汗してやってらっしゃるという姿があらわに発表の中で出てきたような感じがして、どこか全部ここにつながっていくようなそんな感じがいたしました。

それでは、次にEグループお願いします。

Eグループの発表

私達のグループでは、やはり地域性が大事だということ、先程のピーターさんのおっしゃったように自分達の仲間を見つけていく、それが大事だと感じました。地域のニーズを把握してから、文化なども考慮しながら対応していくという点が重要だと思います。

懸念点としては、ウブントゥという助け合う精神がもともとあるのだったらいいと思うんですが、地域によっては違いがあると思いますので、先ほど出たように都市部と田舎の違いであったり、途上国とか先進国の違いであったりとか、そういう差があると思いますので、どう取り組んでいくのか確かに課題だと思います。

あとは一点、我々のグループで出たのは、災害などが起こった時には、障害者を守るという視点になると思うのですが、そうではなく、障害をもっている自分でも自分で動けるような社会づくり、基盤を作っていくというのがこれからの課題になると思います。それに伴って政府とかNGOとか民間企業とか、それぞれどのように役割を果たしていくのか、補っていくのか、課題になると思います。

ピーターさんのお話と東近江の事例が、やはりDグループ同様出たんですけど、大きな規模でやっていくのは難しいだろうという懸念点があります。国とか県単位ではまだちょっと難しいのではないかという考えが出ました。

まとめとして、今あるものの価値をちゃんと理解するという取り組みが挙げられました。以上です。

尻無浜 ありがとうございます。今の発表で何かコメントありますでしょうか。はい、ありがとうございます。それではF、お願いします。

Fグループの発表

Fグループの報告をさせていただきます。Fグループは全部で8名で、イランの障害のある方の支援をしていらっしゃる団体の方4名とあと大阪からの方3名、わりと似た職業の方が集まりました。

午前中の話の中で、他のグループとも共通していましたが、こちらのグループで出たのはウブントゥの部分ですね。三方よしもそうですけど、ウブントゥという考え方は決してアフリカに固有のものではなくてアジア圏にも同じような考え方もあるし、イランでも同じような考え方がある。共通な視点がある考え方が見られたと捉えています。その部分を生かしていけるともっといろいろ制度ができるのではないのかという話が出ました。

ウブントゥでポイントになるのは、個々のつながりのところではないか、個々のつながりが大事でつながることに意味がある、ネットワークを足していくことが大事だということが話として出ました。

つながりというところで言いますと、障害のある当事者の方なんか、例えば自分がどういった将来の生活を考えていこうかという時に、あんまり遠くの偉大なロールモデルみたいなものは参考になりにくいので、もうちょっと身近なロールモデルとどうやってつながっていくかということをお話の中で出していただけると、障害をもっている人達も将来を考える時に参考になるのではないかという話

も出てきました。

一方で人と人とのつながりの話で言うと、若い人、都市に住んでいる人、現代の我々は結局自分のプライベートな時間が大事なので、人とのつながりは求めているけれど、でも人に干渉されるのは鬱陶しいというところがあって、その辺の両立をどうやっていけばいいんだろうかということが、これは他のグループさんと共通していますが、そのような話が出ました。

一つのこのグループの中で出た解決策としては、啓発のようなものが重要であるということです。障害のことで言うと、障害に関するリスクというのは万人に共通なものであるので、こういうことを一般の人達に啓発していくことが大事なのではなかろうかということが出てきました。多分 CBR とか三方よしを考えた時に、つながりつつも、だけどやっぱりそっとしておいて欲しい、というところが我々の勝手な話なんですけど、この勝手なことをどういうふうを実現していくかということが大事なのかなと思いました。

あともう一つは、Dグループのデイビッドさんはどんなふうにエンパワーされていったのか、というのと似ていると思うんですけど、デイビッドさんみたいな人をどんどん地域の中で生み出していくには、そうした人が生まれていくには、例えば外部者としてそこに入っていき外部者はどういうことができるんだろう、外部者がどういうことをしたらデイビッドさんみたいな人が生まれるような状況になるのかという議論が出ました。それについて具体的にこれだという一つの答えというか、解決のアイデアとして出たものは、現地のニーズにあった商売、ビジネス、現地の状況にあった商売、ビジネス、活動というものを、その国に合った、社会に合った解決策を考えていくことが大事なのだろうということが、アイデアとして出てきましたけど、これだという、外部者はこうすればいいんだということの結論までは出ませんでした。その辺も何かコメントいただければありがたいなあと思います。

まとまらないのですが、このようなところがFグループからです。

尻無浜 はい、ありがとうございます。このようなグループのディスカッションをそれぞれのグループでご協力いただきました。ありがとうございます。

準備をした者としては、皆さんが自分の取り組みと受けた概念と消化して帰っていただけたらと思いついて、ディスカッションする中で参考になればと思ってこのような形で進めさせていただきました。

貴重な報告を今全体で共有したわけですが、最後の時間になります。そんなことも踏まえて、もう一言、せっかく東近江の方も来ていらっしゃいますし、ちょっと午前中少し足りなかった部分を含めて補足してもらい、小椋さん、山口さん、野々村さん、今回のセッションの最後のまとめということで、コメントをいただけたらと思っています。

東近江のつながり

小椋 伺っていて、懸念されている部分は我々も共通項が多いのかなあとと思いました。東近江は1市6町が合併しました。この中に1市6町の人たちがまんべんなく入っているのかということとそうじゃないですね。ほとんど入っていない町もありますし、そんな中で魅知普請（折り込み図）を出している。この中に個人の名前が入っていますよね。個人の名前を挙げていただくと、僕らみたいにそ

れこそ65年ここに住んでいる人もいれば、京都、大阪あたりから会社がこちらに来てそのまま通勤で来られている方もいらっしゃいますし、山口さんのように隣の市から東近江に通われている方もいて、結構バラバラで、頭で考えるほど難しくないんじゃないかなということなんで、それだけ関わってくるのは結構望ましいという話もあるんですけど、この中の活動をすることでどんどんと数を広げていかれた方も結構おられます。

人と係わることの面白みをご存知なく、なんとなく好ましく思っておられる方もいらっしゃるかな、そんなことも感じていますね。

それからさっきのように、やっぱりフォーマルなことだけでつながっていても、なんとなく固いものになってしまう。行政と協働ということが流行っていますけども、双方が自立してなければならぬ、みたいな言い方をされるんですけど、そうではなしにもう少しお互いが支え合うことで互いが自立するという、そういうところが見えてくると、このようなつながりができやすいかなと思っています。

最後に、大阪で薬物依存からの回復支援をされている大阪ダルクの方の言葉なのですが「グッドアドバイスなど聞きたくない、私達が聞きたいのはあなたのグッド・ニュースだ」ということを言われたんで、我々はグッド・ニュースを皆さんに投げかけ、そのことによってみんな前向きになれる、ポジティブになれる、そのことを合言葉に地域福祉をやっています。

尻無浜 ありがとうございます。山口さん、よろしくお願ひします。

山口 そうですね。私、東近江からしたら完全によそ者なんですよ。違う地域から来て、実はもともと県の職員でしたので、派遣で市役所について、この人何年いるんやろう、という雰囲気の中で仕事をし始めたんですけど、その時は私はずっと関わりたいと思ったから県を辞めて東近江市役所の職員に入らせていただいたんですけど、そうですね、なんかこのすごさというのは、カチッとこんなもの（折り込み図）が出来上がって「すごい」と言っていたけども、全然カチッともしなくてですね、カチッともしようたら絶対うっとうしいと思いますよ。こんな人数を集めようとする行政マンは絶対いませんし、こんなもんを年に2回運営せえって言われたら、多分誰もやるものはないと思います。

だからネットワークという言葉が似合わないですねと、明治大学の小田切先生にも言われたんですけども、神経細胞のようにフツとつながるときもあれば、そのつながりがフツと切れるときもあるんです。それでいいんじゃないのというような関係性をドンドン作っていくようなイメージ。ある程度の大きさを超えともうあとは勝手に、いつの間にかつながったり、フツと関係が切れたり。でも思い出したようにまたつながったり。だからそういうことを見ると、市長がいつも言うんですけども、とにかく行政がコントロールできない地域にして欲しいと言うんですね。

なので、私も全てを把握していて、じゃあ小椋さんとか私とかが引っ張っているのかと言ったら、全然そんなこともありませんし、市長がリーダーシップを持って引っ張っているのかと言ったら、全くそんなこともない地域になっています。

作業の分担など、引っ張る方が必要だとおっしゃる方がいますけども、本当にそうなのかなと私ちよっと疑問です。ちょっとだけ周りのお手伝いをしてもいいかなと思う人が寄っているだけなんです。だから障害者の方の働きを支援するような野々村さんのような人がいるように、こういうつなが

りができたらいいなあと思う人がそれをちょっとお手伝いしてるだけで、誰かがそれ以上すべてを把握しているかと言ったら、いつもね、全くそんなことはなくて、私もわからないことばかりで小楳さんに相談する。小楳さんも皆に聞きながら、そうか、やっぱりそうやなあと開催する場所だったり、こうだったりするのを議論していく、そんな関係で今やっているの、そんなに高いハードルをどうぞ皆さん超えて下さいと言っているつもりは全くありません。こんなに誰かのためと思って活動されている皆さんだったら、いとも簡単にそんなことは地域でできると私は思います。はい。

尻無浜 ありがとうございます。野々村さん、お願いします。

双方のメリット

野々村 ありがとうございます。Cグループの方がお互いに支援関係があるのはメリットがないと、という話をされたと思うんです。まさにそうだなと思ったんです。本当にそうですね。メリットをどう感じてもらうかって考えた時に、今いくつかの会社の社長の顔が浮かんでたんですけど、先ほどお話をさせてもらった時に、障害のある方の働きとか引きこもっていた人の働きとか、地域貢献というのがその人にとってもプラスで、企業にとっても地域にとってもプラスじゃないと意味が無いと言ったと思うんです。でも考えてみたら、ほんまやなと思った。自分で言っておいて、本人だけにメリットがあるんちゃうかなって、今ちょっと思ったんですけど。

私、企業さんにとってのメリットはなんですかと言って企業に決めてもらっているんです。あのう、矛盾するんですけど、本人さんが、この前はった高次脳機能障害の方なんですけど、脳梗塞によって記憶障害と失語症と感情コントロールが全くできない、今41歳の男性なんですけど、どうしようもない状態なんですけど、でも彼は働かないと生活ができないので、じゃあ一緒にやろうかということ、で企業さんに行っただけなんですけど、企業の社長にはくっついてかかるし、仕事はどんだけ覚えても毎日が初めてなので、「こんなことは聞いていない」というのが朝から夕方までずっとなんです。で、その彼の働きって「企業のメリットって社長、なんなん？」て言うたら「お前が連れてきたんじゃないか」って話をするんですけど…。

彼は、ようよう考えたら、1時間以上の記憶がもたへんということがすごくよくわかってきて、じゃあ工程の細分化と時間単位で、今1時間たってどうかという、自分の状況がわかる環境設定をしていったらどうやろうという話になったんです。そうすると彼は1時間手前の50分になると自分で自ら自分の表に書き出すんですね。自分が1時間前にやった仕事を。そうするとなんとなく繰り返しの中で彼が仕事から自分のやるべきことがわかってくるようになったんです。そんな時、会社のメリットが何かと社長に聞いたら、もう一回会社の全部の詳細にわたる作業分析ができた。彼を中心に変なチームワークができてきた。あいつもうじき怒りよるぞという時には、若い女の子を横に行かせようとかね、なんかよくわからないですけど、企業にとってのメリットって何かってやっぱり外からは計られないんですね。その企業ですってその会社を作った方とか、その地域を作ってきた方にとってのメリットなので、なかなかこれが描けないので、この人がこの地域でこういう働き方や暮らしをした時に、この地域のメリット、この企業のメリットは何だと思おう、と相手の人に聞くことがとても多いから、そのメリットは何かと一緒に考えてくれはるような関係が大事なのかなというふうに思っています。

それとFグループの方が現代人の理想とする生活のつながり方とは、という話があったんですけど、

本当にうちも、それを今、福祉という業界の中で直面していました。関わり合いとつながり合いというのが、どういう距離感が一番いいのかっていうのが、本当に人によって違うので。その時にある一人の障害者の方が教えてくれたんですけど、「さみしくない程度に自由でありたい」。天才やなあと思ったんですけど、寂しくない程度に自由であるっていうのってすごく大事だと思うんです。でもそれって私と山口さんでちがうと思うんです。彼は社交的なのが全然ダメなので、休みの日はひたすらじっとしてる感じなんですけど、多分アクティブに動かざる人もいるし、人によって違うので、それもやはり選べる、選択ができるつながりもすごく大事だなと思っています。

魅知普請の裏側にあるもの

あとは東近江の評価なんですけど、お二人がしゃべってくれはった後でこんなん言うの申し訳ないんですけど、あの私はこれ（折り込み図）が紙1枚のペラペラで、作らはったのはすごいですよ、すごいと思うんですけど、うちの現場としては、これの裏側のほうがすごく大事で、これによっていろんなものが作られているというのが、チームとかではなくて、これはネットワークとかでもないんですよ。なんかいっぱいあるんです。

例えば、うち言ったことなかったかもしれないですけど、これによってね、障害者の人もそうなんですけど、私らも田舎って全然建物がないとトイレに行けないんですよ、トイレに。トイレが全然ないでしょ。そうするとこの中に載ってるところは、全部トイレに行っていないんですね。本当にそういうことなんです。いつでもトイレが借りられる地域づくりをしたいと思ったんです。

そうすると先ほど少しお話したんですけど、ある自閉症の人とかも一般の企業で働いてはるんですけど、そこ3時間に1本しか通らない田舎なので、バスがね、来ないんですよ。その間に帰りは必ず1時間あくんです。普通会社って1時間あく会社はその時間で終わるので、どうしていいかわからないんですけど、そこで考えたのが、地域にあるバス停の近くの企業を休憩時間の場所に使うんです。だからバスが来るまでの1時間は、その企業で茶を飲む。それも企業さん同士のつながりは無いのに、地域という建物があるだけでつながってしまう。それも実は、これ（折り込み図）で出会った企業さんなんですけど。そういうチームとか仕組みとかだけではない、現場や社会に使わせてもらっていて、うちはうちで活用させてもらっていると思っています。それが、私ら支援者というのを応援団と呼んでいるんですけど、そういうものが企業全部、団体全部が応援団になれば、多分地域が障害のある方の働くことの応援団になれば一番、支援者が楽かなあと思っています。以上です。

尻無浜 はい、ありがとうございました。次にピーターさんに、午後のセッションを聞いてコメントをいただきたいんですが、いかがでしょうか。

コールリッジ ありがとうございます。

まず一番言いたいのは、今日この場において、皆さんとディスカッションを共有できたこと、本当にとっても楽しかったです。こういう状況の時には私が話す以上に、教える以上に、教わることがとても多いです。特に私の右手に座っている東近江の皆さまからのお話を聞くと本当に勇気づけられます。

皆さまの話聞いてアインシュタインが言ったことを思い出しました。アルバート・アインシュタインのことはご存知ですか？ 彼は、私達は問題を起こした人達と同じ考え方、精神構造ではその問題を解決することはできない、と言ったのです。

ですから、問題が作られた方法と同じように考えていたらその問題を解決することは絶対にできません。私達は違う考え方、行動の仕方をしなければいけないわけです。今日、東近江の方々の実例を聞いて、すでに一つのコミュニティではそれが実践されているということが分かりました。

崖っぷちにいるというのはとても危険ですが、エキサイティングでもあります。そして通常そこから新しい考えが生まれます。私はいつもルールを破るということを好んできました。ですからルールが壊されているという話を聞くととても元気づけられます。私達はそうしながら前に進むのです。ルールを壊す、つまり先人たちがやってきた方法を壊すことで前に進むのです。

およそ30年間 CBR を見てきましたけど、その進化のプロセスは、古いルールを壊して新しいルールを導入する、その繰り返しでした。CBR は開発に関して多くのことを教えてくれます。つまりそれは支援関係のネットワークをつくるということなのです。

多くの人が言いましたけれど、このネットワークや支え合いというのは障害に限定されたことではありません。私達がやる全てのことに適用されます。そしてこの惑星の上で前に進むための唯一の方法だと思っています。

私が言いたいことは以上です。ここで皆さまと共に過ごすことが出来て、実に素晴らしい経験をさせていただきました。日本には初めて来ましたが、本当に素晴らしい経験をしています。ありがとうございました。

尻無浜 ありがとうございます。僕は、実はこの CBR の概念を初めて聞いたのは、25 年ぐらい前、この日本障害者リハビリテーション協会に来て聞いたんですね。その時に聞いたことは、よく覚えていますが、CBR は開発途上国で障害者の政策を進めるのに有効だと聞きました。

では日本では？、障害者以外では？、CBR は使えないのかというふうに疑問を感じたんです。

15 年ぐらい前から長野県の松本市に住むようになって感じたのは、地方に住んでいて、ずっと日本に住んでいて、ふと日本の地域福祉でも CBR は有効ではないかというふうにずっと思っていました。そんなことに基づいて今日も CBR をやってきたピーターさんの CBR の捉え方と、日本の地域福祉で実践してらっしゃる三方よしですね、できればその日本の地域に CBR のいろんな要素が有効的に発揮できるのではないかなんと思っています。それは地域福祉が、日本の福祉政策と共にそのあり方がどんどん変化しているということと、今日も出てきましたが、CBR の捉え方そのものが進化しているというような状況の中でできているのではないかと思います。

今まで開発だとか国際援助だとか支援だとかという視点で取り組んできたことを今度は、日本国内においても諸外国での取り組みが同じような視点で活かすことができるのではないかと感じています。CBR は CBR だけの対象国だけではなく、先進国の日本にも使えとか、それぞれの支援国でも使えとか、両方の視点で CBR の概念をきちんと理解して進んでいくことが有効ではないかと思いつくと思ひまして、今回は、イギリスからピーターさんのお話、滋賀から三方よしの東近江の方々のお話、そしてご参加の皆さんとの意見を集約したかったのです。

午後のセッションはこれで終わりにしたいと思います。ご協力に感謝いたします。

◆ まとめ

尻無浜 最後に午後のセッションと午前中のセッションを受けて、琉球大学の高嶺さんに総括をお願いしたいと思います。

高嶺 皆さん、お疲れ様でした。総括をとということですが、今日一日のお話、ディスカッションを短い時間で総括することは、それこそ至難の業ですので、今回ピーターさんのお話の中で感じたこと、午後のセッションや、質問の回答で印象に残ったことを話して総括としたいと思います。

ピーターさんは、最初になぜ CBR に関心を持ったかというお話の中で、世界が今いろんな面で危機的状態にあるということ、それが CBR に取組むきっかけになったと話されていました。

私も幾つもの国々を回っていますが、そういう危機感を感じられるんですね。今年の7月にスウェーデンで世界ソーシャルワーカー連盟の総会があって参加したんですけども、スウェーデン、ヨーロッパにおいても経済危機が広がっており、重たいムードが総会の中でも感じられました。その中で印象に残ったプレゼンテーションがありました。それは今途上国の若い夫婦で子供の数が頭打ちになっているという話なんですね。バングラデシュ、ネパール、インドなどの若い夫婦でも、子供の数は2人程度になっているという報告でした。先進国の我々は、途上国はまだ子沢山でこれが貧困問題の原因であるということはまだ信じていますけれども、実際今は途上国の人の意識がどんどん変わっていて、経済発展も進んでいます。そのためいろんな面で途上国と先進国の格差がなくなっているということが分かります。私は、実際にいろんな国を訪問しますが、先進国と途上国の様々な差が縮んできていることを実感します。そういう現象を見ると世の中のグローバリゼーションがすごいスピードで進んでいることを感じます。今は、企業もどんどん統合化されて、そして、それらの大きな企業がどんどん世界中に進出していき、国を超えて世界をコントロールしていっています。そういう中で、途上国や先進国を問わず、「地域」が崩壊されているという印象があるんですね。

グローバリゼーションの中で、地域が崩壊していくという段階にあると思います。そこで、これからは、どのように地域を守っていくか、そういう課題があると思います。言い換えれば、グローバリゼーションの中で、我々はどのようにして自分達の地域での生活を守り、維持していくかということを実際に考えなければならないというところに来ているのではないかと感じています。

現在、開発途上国を中心にして、CBR の手法を使って地域をきちんとサポートしながら、障害者を含めていろんな方の生活を支援しようという動きがありますが、同じように日本でも今日発表があった東近江の地域での取り組みがあります。今日のセミナーを聞いていて、地域を支援することに関しては、途上国と先進国の違いもそろそろなくなっていると思えます。そのことは、我々日本に住むものも、これまで CBR で培った支援の仕方、コミュニティづくりというのを学ばなければならない時期に来ている気がしました。

地域を支えるためには、人と人をつなぐ大切さ、そこをきちんとおさえること、いろんな議論が出ましたが、ポジティブな面からのアプローチから人間を支える、フォーマル、インフォーマルなつながりを構築することもやっていけないといけない。ということを考えていけば CBR の取り組みも日本の地域福祉の取り組みも共通な課題があり、今後、いろんな面で交流しながら相互理解と、共通な取り組みを進めていけるのではないかと、という感想を持ちました。

これでセッションを終わりますが、この後の懇親会で、今日学んだことや、取り組みを話しあう機会があるとおもいますので、その中で交流していただきたいと思います。

ということで、私の感想を総括としたいと思います。ありがとうございました。

司会 それでは、午後のセッションまで、皆さんディスカッションの時間と最後の時間と本当にお疲れさまでした。今の高嶺さんのまとめてくださったこと、その前にスピーカーの皆さんから感想をいただいたことから、本当に多くのこと、それぞれがそれぞれの立場でいただければよかったかなと思います。私達主催した者たちでずっと話してきたんですけども、海外の途上国でやってきたことと国内のこと、高嶺さんが話していましたが、共通点があるのに、なかなか一緒に議論する場がなかったということから、ぜひこういう場を設けて議論してみることで、何かそれぞれ発見があったり、視野が広がったりすることがあれば、ずっと皆さまの活動に役立てていただけるのではないかな、という思いでおりました。今日の成果を今日だけで終わらせるのではなくて、何らかの形でぜひ続けていけたらなということも漠然とですが考えていました。それは今日ご参加の皆さまと一緒に話しながら続けていけたらと思います。

一つは CBR について出ていましたが、CBR のガイドラインの翻訳を私どもで進めております。それが出来上がった時点で、CBR ガイドラインが7冊あって1冊が70 ページぐらいのもので、読み度があるものなんですね。WHO のサイトを見ると全部ダウンロードできるようになっています。それをもう少しわかりやすく1冊ごとに簡条書きにして簡潔にまとめる作業を、実は障害分野 NGO 連絡会 (JANNET) で検討会をはじめております。1回目は8月で、半分終えて、あともう1回は12月8日にやりたいと思っています。その案内を皆さんにお送りしますので、どなたでも参加していただける会ですので、ぜひやりたいと思います。

その結果を解説書にできればいいと考えています。CBR ガイドラインをやさしく読み解くものを作って、それを関係者の方々、それこそ地域福祉の方々にはたくさん読んでいただきたいようなことがいっぱい書いてあるので、皆さんと読みながらまた議論を重ねて、それぞれの地域では CBR ガイドラインはそれが欠けてるよ、これは日本にはあてはまらないよというのがいっぱい出てくると思うので、それをバンバン出して、次の段階では日本版のような感じですね。日本に合うような内容の項目のリストアップ、そんなこともできればと思っています。

今日は、本当にご参加いただきありがとうございました。アンケートの用紙を取っていただいたと思いますので、お書きいただいて、次の開催の時に役立てさせていただきたいと思います。

それではこれでセミナーを終了させていただきます。ありがとうございました。

講師プロフィール

✦ ピーター・コールリッジ (Peter Coleridge) 氏

イギリス在住。現在はフリーのリサーチャーで、障害と開発に関する文筆業。

中近東、アフガニスタン、インド、東部および南部アフリカで、障害に焦点を当てて教育と開発分野で40年の経験を持つ。1980年代 OXFAM (イギリスの国際 NGO) の中近東地域担当マネージャーとして、6年に渡り、ヨルダン、パレスチナ、レバノンで障害へのコミュニティアプローチを発展させてきた。ILOでの主な調査活動では、2003年から2005年には雇用と障害に関する調査に携わった。ロンドン大学およびケープタウン大学で客員教授。WHOの CBR ガイドラインでは生計のコンポーネントの執筆を担当した。

他の著作は『障害、解放、開発』(1993年、日本語訳あり)、CBRにおけるスキル開発 (ILO、2008年)、EC 開発援助における障害研究 (2000年)、貧困と障害 (レオナルド・チェシャー (LCI、2010年))、ハンセン病回復者の活動での評価活動 (インド)、コミュニティ開発としての CBR と貧困削減 (LCI、2006年、経済的エンパワメントの章)

学歴：アラブ・中近東研究修士号 (オックスフォード大学、1966年)、教育学修士号 (ウエールズ大学、1969年)

関心領域：コミュニティの動員、教育、障害

関心を持つ地域・国：中近東、アフガニスタン、パキスタン、インド

言語：母国語は英語、アラビア語は流ちょう、フランス語は堪能、他にドイツ語およびダリ (パキスタンのアフガニスタン方言) の基礎

家族：結婚して3人のお子さんがいる

趣味や関心事：音楽 (フルートとクラシックギター)、環境問題、鳥類学、写真

✦ 小梶 猛 氏

NPO 法人しみんふくしの家八日市理事長

人々が互いに支え合い、尊敬し合って、住み慣れたわが町で、自分らしく生き続けられる事を願って NPO 法人しみんふくしの家八日市を設立、理事長に就任。地域にこだわり、東近江市内で認知症の方の居場所づくりをメインテーマに、グループホームやデイサービス事業を行うほか、訪問介護、いきがいデイサービス、保育、学童保育、NPO 支援、世代交流子育て支援「あったか広場」などの事業を展開している。最近では、地域医療をテーマに「市民が考える医療フォーラム」をシリーズで開催し、市民や医療福祉関係者が集まり、ともに考える場づくりを行っている。生業は一級建築士、司学館高等学校校長。地域から医療福祉を考える東近江懇話会座長、自助具 (福祉用具) の製作ボランティア団体「工房 YOU」代表、東近江国際交流協会会長、八日市大風まつり実行委員会委員でもある。

🌿 山口 美知子 氏

1972年滋賀県生まれ。1998年に林業技師として滋賀県入庁。琵琶湖環境部林務緑政課、大津林業事務所、琵琶湖環境政策室、東近江地域振興局森林整備課（現、中部森林整備事務所）を経て、2010年から東近江市派遣となり、企画部緑の分権改革課に配属。2012年3月滋賀県を退職し、東近江市職員となった。仕事以外では、滋賀地方自治研究センターびわ湖プロジェクト、kikito、NPO法人カーボンシンク、NPO法人まちづくりネット東近江（申請中）等の活動に参加。

🌿 野々村 光子 氏

平成18年～ 東近江圏域 働き・暮らし応援センターTekito一業務に支援ワーカーとして従事。
平成21年～ 雇用ではなく働く場の提供をコンセプトに企業への新しい関わり方提案し展開。
平成23年～ 圏域での応援団ネットワークとして「ICHIOSHI NET」をスタート・・・

ファシリテータープロフィール

- 🌿 高嶺 豊 氏 琉球大学法文学部人間科学科教授
- 🌿 河野 眞 氏 杏林大学保健学部准教授、一般社団法人日本作業療法士協会
- 🌿 林 かぐみ 氏 公益財団法人アジア保健研修所事務局長
- 🌿 尻無浜 博幸 氏 松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科准教授

東近江 魅知普請 曼茶羅

フード、エネルギー、ケアの自給圏を目指し、多様な主体の参加と連携による持続的発展が可能な共生の仕組み

東近江市は、里山、里地、里湖が一つの水系でつながる、人口、面積ともに、日本の1000分の1モデル

○業の花エコプロジェクト 藤井・山田・野村

油のリサイクルから発展し、市民の提案により愛東地区で始まり、全国に広がったリーディングプログラム。東近江ハンドシェイク協議会にも参加し、エネルギー、食べ物の地域循環の仕組みの見える化から、次の一手としてバイオマスまで広がる、FEC自給圏も想定する。

○愛のまちエコ倶楽部 増田・野村・平尾・園田・村山

「地域を元気に」という言葉のもと、農業関係の体験を通じて都市農村交流を実施。理念の「ほんまもん」を「田舎もん」という表現で呼びかけ、たくさんのこだわり体験メニューで、交流の中から地元の元気・誇りを取り戻そうと活動している。

○モリスマイル研究会

野々村・村山・大林・西村・山口

業者、障がい者、地元、大学生などが連携して、採算の合う市民協働の薪炭林再生と障がい者を雇用するしくみづくりに取り組む。

○Okikito 湖東地域材循環システム協議会

田中・大林・澤田・豊泉・山口

「びわ湖の森」を元気にするために、地域材の安定供給や木・紙製品の開発などに取り組む。また、人材育成や環境評価など、森林所有者や業者、市民団体、行政等が構成員となって、それぞれの得意分野を活かしつつ、異業種間連携を図りながら、「持続可能な森づくり」に向けた事業を展開している。

○退職サラリーマン地域デビュー 森田・大塚・社

仲間作りを通じた退職サラリーマンの地域デビューの仕組みをつくり、自らのスキルを生かした役割づくりを追求。この地域で、「緑側カフェ」や婚活事業など多様な地域活性化の取り組みを進めている。

○冒険遊び場 廣田・藤澤・村山

「子どもたちの自由な遊び場」「子どもたちの冒険心や好奇心がいっぱいあふれた遊び場」この遊び場づくりを通して、乳幼児期から思春期までの子どもの育ちを、家庭と学校・園だけでなく、地域とともに支える。

○東近江ハンドシェイク協議会 増田・清水・野村

市内の環境系 NPO5団体、東部のまち協4団体、財団法人、市で構成。有形無形の地域資源を発掘し、それをつなぎ活用することで地域の自立を促し、福祉モールネットにも連携している。

○東近江市体験交流型旅行協議会 清水・川上・中村・谷

「ここには何でもある」という考えのもと、豊かな自然や農林商工業、生活文化等の生業、人々の生活の姿を伝える体験学習民泊を企画することにより、都市との交流、地域の魅力・誇りを再発見する。

○TEAM えん 小倉・西村・北野・北川・谷

「住民と旅人の縁(えん)をつなぐ、地域にお金(円(えん))が落ちるしくみをつくる、旅を演(えん)出する、ええんちゃん精神で実践する」をキーワードに、ほんまもんさんたちとの出会いの中で、真の学習体験ができツアーのプログラム開発を進めている。

○東近江市民共同発電所 西村・野村・植田

地域に根ざした「小規模・分散型」の発電システム。自然エネルギー発電設備を市民が共同所有し、また介護施設とも連携設置したりし、収益を出資者に地域商品券で還元。

○東近江市SUNプロジェクト 吉田

商工会議所が主体となり、エネルギーの地産地消による地域経済の活性化を目指す。地域商品券を活用して、他分野との連携を目指す。

○遊林会 武藤・丸橋

お酒やおいしい家庭料理をいただきながら、木を切って里山を守る、楽しい里山保全活動を通して、退職サラリーマンの地域デビュー、子どもの「モリイコ」や親の環境体験教育を進める、視点を変えれば青空デイサービスなんだと！！里山保全を通して、行政との連携を進めるユニークなNPO。

○加楽・おうみサンパパーカッションワークショップ

楠神・小椋

「国籍が違ってもおはようと言える関係」をめざし、多様性を尊重した地域づくりに取り組む。古紙回収を通じ、ブラジル人学校を支援している。また、ブラジルの伝統音楽「サンパ」のワークショップを通じた文化交流の促進に取り組む。

○認知症地域ケア 小鳥・五箇荘・建部・能登川地区(一部)

認知症の人と家族を地域で支えるため、博物館や図書館人材とリンクし、回想法や建部、五箇荘など認知症行方不明SOSネット訓練、啓発サポーターづくりを実施し、福祉モールネットにもリンクする。

2012/10/1 現在 名前はハブ・キーパーソン、「」は市職員。

<掲載ルール> 1. 行政にぶら下らない 2. プラス思考 3. 手をつなぐ面白さを知っている

○ヒトミワイナリー 岸本: NPO法人スローライフの会で日本酒、醤油業者などと連携。

○マーガレットステーション 藤岡: 地域のお年寄りが活性化し、地産農産物の直売所。

○池田牧場 池田: 地産地消乳製品、獣害駆除産肉などを活用した農家レストラン、ジェラートアイスクリームを展開。

○京セラ蒲生工場 澤田: グリーンニューディールで電動アシスト自転車&太陽光パネル提案。

○よこせ梨園 横畝: 地域の農産物生産者、ヒトミワイナリーなどと連携、「近江マルシェ」でスーパーとも連携。

○たてべ大果樹生産組合 込山: 合鴨農法で畑酒造の酒粕づくり、そのつながりで、合鴨が仏、伊料理に応用。

○楠亀大工 楠亀、木屋長工務店 小椋: 地元鈴鹿産材を活用した家造り、物づくりを進める。

○ラジオスイート 佐子: 地域に根ざしたコミュニティFMとして、地域のさまざまな情報をきめ細やかに発信する。

○クレフィール湖東 中村: 食を通じて地域の人材とつながる。

○山庄 山本: 絶滅寸前のホンモロコを休耕田で養殖。地域資源を通じて、食の文化の復権を目指す。

○晴れやかファーム 毛利、森: 新規就農者の受け入れ、京都出店、持続可能な農業を目指す野菜ソムリエ。

○薪遊庭 村山、鍛鉄工房 安川、マックスウッド 回淵: 地域のバイオマス資源を、環境・福祉と連携し、活用する道を探る。

○チーム川原 福井: 渡来人の色濃く残る市子川原の自治会有志による、地産・地消・地消して地笑を目指す。

○ファブリカ村 北川: もの・こと・ひとが集まり、活気を地域につくるよこびにふれる場所を発信するアーツ&クラフトの拠点。

○子民家 etokoro 近藤: 駅前の古民家を改修し、地域交流の拠点、子育て支援も視野に入れた取り組みを展開。

○ライオンズ旅行企画 小倉: まちなかジャズフェスティバルを仕掛け、地域資源を活かしたツアーを企画。

○コナリエ 青山: 廃食用油という地産地消のエネルギーを活用し、地域づくりの起爆剤として活用。

○八風谷の小さな道の駅「萌黄」 中島: 奥永源寺の活性化に向け、地域情報の拠点として活躍。

まちづくりネット東近江

井上・大西・森下
野村・小椋・武藤・山口・谷
コミュニティビジネスと市民活動を
支える中間支援組織

“つながる
生まれる
くらしまること”

“生活総合支援戦略”他 東近江市モデル

「免田」・「泉本」・「山本」
「井口」・「外村」・「青木」

ひがしおうみ環境円卓会議
内藤・金・小椋・野村・山口
地域に根ざした脱温暖化・環境
共生社会研究開発プログラム

○図書館ネット「巽」・「武藤」・「前崎」・「鈴村」・「松野」・「江竜」・「西澤」・「橋本」

図書の貸し出しにとどまらず、環境・福祉・健康・医療・農業・文化・まちづくりなど多様な分野それぞれがクロスする仕掛けや地域連携を、図書館ネットで支援し、その中から、疾患別の患者闘病日記コーナーで医療福祉の動きを支援、グリーンメンテナンスで障がい者雇用を支援、図書のリサイクルシステムで環境支援を行う。

○しみんふくしの家八日市 小椋

地域市民の助け合いを出発点にして、高齢者、子ども、障がい者それぞれが支え合うしくみを、介護保険などを活用して進め、その収益をもとに地域医療の提案、外国人支援、他のNPO 法人支援など、地域の公共を担うNPO 法人のあり方を示し続けている。福祉モールネットにもリンクする。

○かじやの里新長衛さん 南部

住んでみたい「かじやの里」実現のため、福祉モールも意識しながら、地域と施設、レイカディア大学の学生等とのコラボの中で、認知症 SOS 訓練や健康長寿促進を進める。

○クリエイトプラザ 花原・柴田・姥原

障がいのある人が普通に働き生活できる社会を実現するため、福祉モールも意識しながら、地産地消・特産品づくりや近江商人屋敷が建ち並ぶ伝道地区金堂で「うどん喫茶の店 いっぺき」を出す。

なりわい 業

○東近江市フードシステム協議会

橋本・「北川」・「藤井」
「山口」

生産をあきらめない、生き残る農業の仕組みづくりをめざし、川下から川上への提案と、横串を指す。

○獣害駆除と地産地消

田井中・「小泉」

農業被害を軽減するために捕獲された鳥獣を地域の温泉や宿泊施設で食材として提供。

○エコラボハート事業 城、働き暮らし応援センター“Tekito” 野々村

環境配慮製品を障がい者が配送することで雇用の創出を生み出し、併せて、障がい教育、環境教育につながり、環境と障がいのコラボと CSR をすすめる。併せて、葬儀屋、古本屋、介護屋、葉刈屋、めし屋、洗い屋、精米屋、パン屋、うどん屋、酪農屋、郵便屋などこれからの障がい者の新たな働き場開発を、異業種連携の中から進める。福祉モールネットにもつながる。

○茗荷村(=社福) 美輪湖の家、(有) 美輪湖 仲本・高城・鶴田

「賢愚和楽」「自然随順」「物心自立」「後継養成」を村是にして、障がいをもつ人と障がいをもたない人が共に暮らす中で、自立循環型・少量生産少量消費社会づくりを目指す。特産品や無添加無農薬の食品開発などの地域農業支援、トラックによる移動販売による買い物支援など地域活性化に取り組む。また、東日本大震災の被災地支援事業やフェアトレードによる低開発国支援、サハリン残留韓国人支援など、国際的な課題も視野に入れ、幅広い社会的な課題にも取り組む。

○三方よし研究会 角野・小鳥・中村・花戸・福井

医療関係者だけでなく、介護系や市民も参加し、顔の見える中で地域連携クリティカルパスの仕組みづくりを推進し、それが医療福祉を考える懇話会につながる。

○地域から医療福祉を考える東近江懇話会 小椋・小鳥・福井・中村

市民が医療・看護・介護・宗教・図書館・救急などの専門家と連携して、医療福祉在宅看取り体制を推進する活動を展開し、図書館の患者闘病日記コーナー、そして若い母親が「はちどりの会」を作り、「病院に行くその前に」を作成し、コンビニ受診の改善を目指す。

○福祉モール構想 太田・増田・小椋・川副・野村

医療福祉を考える懇話会から生まれ、地域で高齢者を支えるNPO結の家が呼び掛け、福祉・医療等の関係者が中心に、認知症になっても、脳卒中になっても、介護保険の対象にならなくても、障がいがあっても、安心して暮らせるエリア、拠点づくりに取り組む。東近江ハンドシェイク協議会から生まれた(株)あいつるさと工房が経営する「農家レストラン」や、障がい者による給食配食サービスや移動販売も視野に入れている。

製作: 魅知普請の創寄り(東近江市内のキーパーソンが集う会)

ボランティア

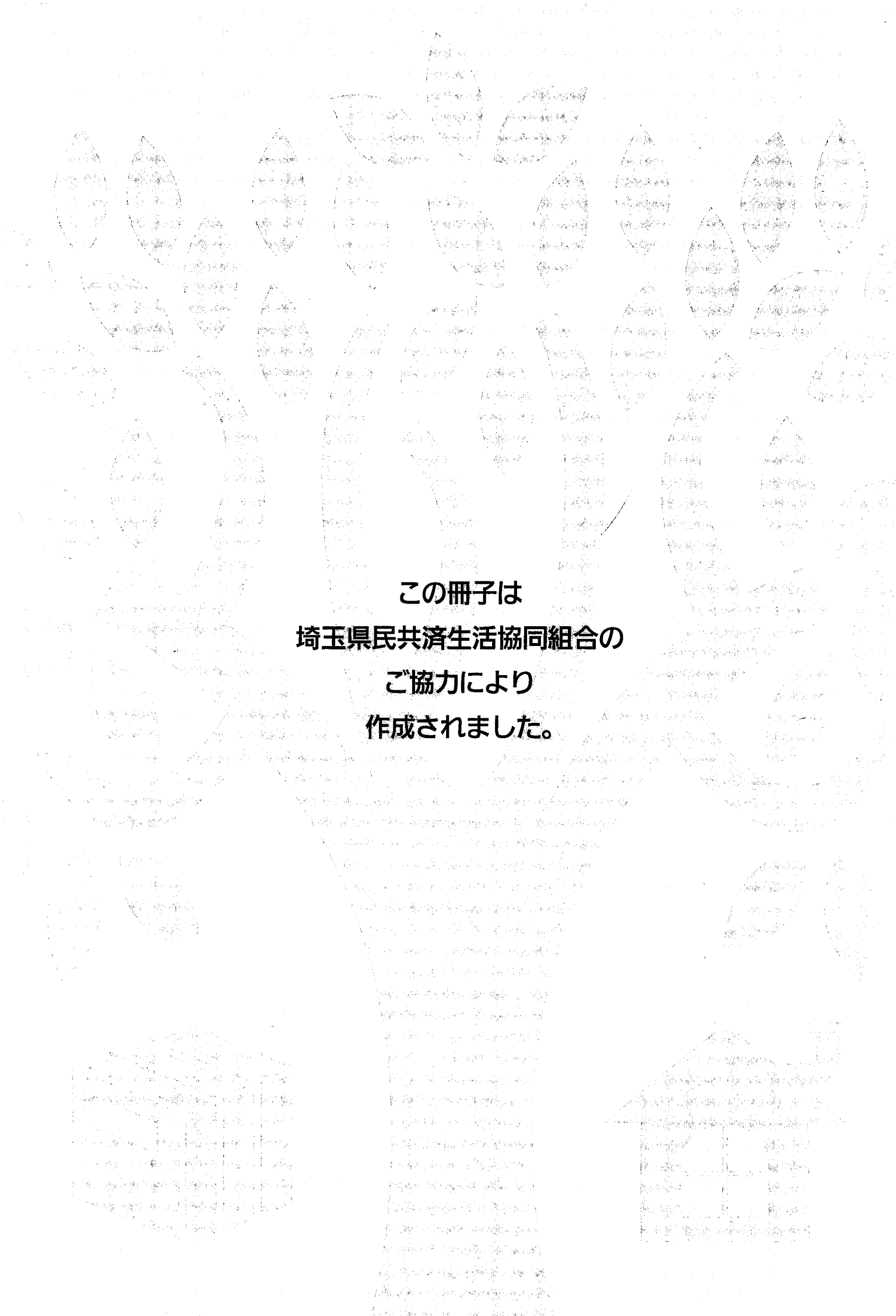
2012年12月末

(公財)日本障害者リハビリテーション協会

〒162-0052 東京都新宿区戸山1-22-1

電話:03-5273-0601 FAX:03-5273-1523

URL:<http://www.jsrpd.jp/>



**この冊子は
埼玉県民共済生活協同組合の
ご協力により
作成されました。**